せたがや福祉区民学会 第2回大会

報告集

学びあい、ひろげよう せたがや福祉の輪

> ~区民とともに歩む 地域福祉を求めて~

日 時 平成 22年 12月 11日

会場日本大学文理学部キャンパス

主催 せたがや福祉区民学会第2回大会実行委員会

共催 日本大学文理学部、社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会、

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団

後援 世田谷区

目 次

1	せたがや福祉区民学会 第2回大会プログラム・・・・・・・・・	1
2	会場見取り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
3	「せたがや福祉区民学会」第2回大会挨拶・・・・・・・・・・	3
4	基調講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
4	「区民とともに歩む地域福祉を求めて」	J
	田中荘司氏(日本大学客員教授)	
5	実践研究発表および分科会一覧	_
	分科会一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12	3
	第1分科会 子育て・母子支援	
	(1) 地域で育ちあうために	_
	―学内子育て支援センター「ぴっぴ」からみた親子たち―・・1'	1
	(2)「世間」のまなざしから「支援者」のまなざしへ	^
	〜母子生活支援施設から見えてきたこと〜・・・・・・・1!	
	(3) 児童養護施設学習支援活動「桜んぼ塾」について・・・・・2	
	(4) 地域における「発達相談室」での取り組みと課題・・・・・2 (5) めばえ学園における療育の内容・・・・・・・・・・・2	
	(5) めばえ学園における療育の内容・・・・・・・・・2 (6) 児童福祉と高齢者福祉の仕事にかかわって	Э
	(b) 児里倫征と尚即有倫征の江事にがかわって 一対人サービスの視点から考察するー・・・・・・・・2'	7
	第 1 分科会総括・・・・・・・・・・・・・・・ 2 ¹	9
	第2分科会 施設での生活の充実	
	(1)「施設で楽しむ郷土料理について」・・・・・・・・・3	1
	(2) 主体的でいきいきした生活の維持を目指して	
	~特別養護老人ホームだからできる経管栄養利用者のケア~	
	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	3
	(3) いつも笑顔で~安全・安心を守りたい~	
	利用者に直接関わるアクシデント(介護事故)への取り組み	
	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	5
	(4) 高齢者に対するレクリエーションの効果の検証・・・・・・3	7
	(5) 高齢者施設における園芸療法の実践・・・・・・・・・3	
	(6) 老人のためのぬり絵作り-デイサービスでの実践報告-・・・4	
	(7)「健口体操に呼吸リハビリを取り入れたその効果について」・・4	3
	第 2 分科会総括・・・・・・・・・・・・・・・ 4	5

第3分科会	認知症ケア/介護と医療の連携
(1)	認知症対応型デイサービスの新たな取り組みと今後の課題
	「夕食を食べてから、帰ろう!」・・・・・・・・・47
(2)	入所施設での、認知症高齢者の方への新たな
	アセスメントシートの工夫 ~職員の気づきの大切さ~・・・49
(3)	認知症になっても住み慣れた場で安心して暮らし続けるために
	〜医療と介護の連携による重度の認知症の人への誤嚥防止の
	取り組みとこれからの嚥下機能維持に向けた認知症支援の
	あり方を考える~・・・・・・・・・・・51
(4)	若年認知症者への通所介護サービスとは
	~求められる役割について~・・・・・・・・・53
(5)	小児がんの疾患特性に基づく MSW 介入の在り方に
	関する考察・・・・・・・・・・・・・55
(6)	心を近づける介護と医療行為の実際
	「訪問介護に役立てる ALS の理解と援助の方法」の研修報告・ 57
(7)	訪問看護ステーションとグループホームが協働して
	行った看取りへの取組み・・・・・・・・・・59
第3分	科会総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第4分	科会 家族(介護者)支援/地域支援
	科会 家族(介護者)支援/地域支援 脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響
(1)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響
(1)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63 家族の力と訪問看護の役割
(1)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63 家族の力と訪問看護の役割 -家族生活力量アセスメントスケールを用いた評価と
(1)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響
(1) (2) (3)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) (2) (3)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) (2) (3) (4)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) (2) (3) (4)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) (2) (3) (4) (5)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) (2) (3) (4) (5) (6)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(1) (2) (3) (4) (5) (6)	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響

第5分	科会 地域で支える/ボランティア
(1)	結ぶ つながる 施設と地域
	~上北沢ホームとボランティア~・・・・・・・・79
(2)	セラピードッグカフェ「ころん」の活動について・・・・・81
(3)	ボランティア 1000 の取り組み
	~人と人との繋がりが起こした相乗効果・・・・・・・83
(4)	「私たちの活動の強み」~長く続いている秘訣~・・・・・ 85
(5)	学生が関わる国際支援の在り方について・・・・・・87
(6)	地域における看護師による「見守り訪問」の役割と今後の在り方
	-全高齢者実態把握事業(すこやか訪問)の実践から-・・・89
(7)	デイサービスにおける高次脳機能障害者の商店街を
	活用しての回復プログラム・・・・・・・・・・91
第5分	科会総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第6分	科会 学びあい、人材育成
(1)	あの「すぐ辞めた若者」が実習生だった頃
	~働くイメージが持てる実習を目指して~・・・・・・95
(2)	見てさわれる在宅医療の研修・・・・・・・・・97
(3)	トレーニングパートナーの人財共育報告
	~"桜梅桃李"それぞれの花をたくさん咲かせよう~・・・・99
(4)	学生ボランティアの活性化方策に関する研究
	-昭和女子大学学生ボランティアコーディネーターの課題-・101
(5)	33 期福祉学習・体験・利用コース(2年間)の出会いと
	学生体験の共有・・・・・・・・・・・・・・・ 103
(6)	せたがや訪問介護連絡会の設立と活動について・・・・・ 105
第6分	科会総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
第7分	科会 福祉環境
(1)	「介護保険の住宅改修」の現状と問題点
	ー世田谷区介護保険住宅改修の
	事前訪問調査分析結果からの考察-・・・・・・・・ 109
(2)	実習中に見てきた福祉環境~福祉機器の歴史~・・・・・ 111
(3)	わが国におけるセーフティネット機能の脆弱性・・・・・ 113
(4)	高齢者施設で結核患者が発生してもあわてないために
	~世田谷区では年間71人の後期高齢者が
	結核を発病しています~・・・・・・・・・・ 115
(5)	「消えた老人」問題について
	~社会全体の絆であんしんな社会を~・・・・・・・ 117

	(6) 浅草バリアフリー実態調査
	- 車椅子体験を通して分かった
	見えるバリアと見えないバリアー・・・・・・・・ 119
	(7) 高齢者への外出支援サービスの必要性について
	~温泉リハビリ外出支援バス事業を通じて~・・・・・・ 121
	第7分科会総括・・・・・・・・・・・・・・・・・125
6	全体総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
7	せたがや福祉区民学会役員および第2回大会実行委員名簿・・・・・ 12'
8	資料編
	参加人数集計表・・・・・・・・・・・・・・・ 129
	当日の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130

注 用語については、発表原稿原文のまま掲載しています。

せたがや福祉区民学会 第2回大会プログラム

(1) 平成22年度総会 (12:00~12:15) 3505教室

(2) 第2回大会 全体会 I

(12:15~13:00) 3505教室

- ○開会挨拶
- ○基調講演

「区民とともに歩む地域福祉を求めて」

田中 荘司 氏(日本大学客員教授)

(3) 実践研究発表 (13:10~16:10) 各会場

第1分科会 3501教室 第5分科会 3508教室

第2分科会 3502教室 第6分科会 3509教室

第3分科会 3504教室 第7分科会 3510教室

第4分科会 3506教室

(4) 全体会Ⅱ (16:20~17:00) 3505教室

- ○各分科会総括
- ○大会総括
- ○次年度開催校挨拶
- ○閉会

(5) 懇親会 (17:15~18:30) 食堂 (カフェテリア・チェリー)

- ○会長挨拶
- ○開催校挨拶
- ○懇 親



【総合受付】 3号館5階 エレベーター横【全体会】 3号館5階 3505教室

【分科会】 3号館5階 各教室

※詳しくは、次頁をご覧ください。

【 懇 親 会 】 食堂(カフェテリア・チェリー)

「せたがや福祉区民学会」第2回大会挨拶

このたび第2回せたがや福祉区民学会大会を開催するにあたり、会長としてご挨拶申し上げます。

いうまでもなく世田谷区は東京都において、いや全日本においても、かなり 文化性の高い地域であるということを感じておりますし、かつ、また地方都市 と比較すれば、これまた 84 万人余りの人口をかかえているかなり大きな地域で す。この地域の中で、住民の福祉を担う行政と地域の福祉支援をまとめるせた がや福祉区民学会とが協力する、このような大会を行うことは、他の行政区に 及ぼす影響も極めて大きいものと考えています。

発足は高齢者への地域介護の認識を広めるという意図もあったようですが、 社会福祉はゆりかごから墓場までの人生を共有し、相互の思いやりのある生活 をつくり上げていくことが求められています。このような学会において多くの 福祉支援団体やボランティア団体の方々の活動が紹介されることによって、区 民の方々も参加したいという気持ちがめばえ、さらなる支援の増強に加わって いただけるのではないかと期待しているわけです。

私もこの世田谷で50年近く子どもの保育や発達障害の人の支援を行ってきましたが、幸いこの地域の人たちから温かく、かつ幅広い理解をいただいております。最近は、地域の多くの支援連携の必要性を感じてきております。ここで名刺を交換しあったりして、支援者達がお互いを知り合い、共に地域の実質的な福祉の向上に寄与していければと願っております。

平成22年12月11日 せたがや福祉区民学会会長 石井哲夫



基調講演

区民とともに歩む地域福祉を求めて

田中 荘司 氏

(日本大学客員教授)

基調講演

区民とともに歩む地域福祉を求めて

田中荘司(日本大学客員教授)

1. 福祉との出会い(自己紹介)

日本 失敗

- 2. 官僚主義と専門主義(学会発表)
- 3. 幻の総合福祉法制定への努力(昭和57年の動き)スウェーデン成功(社会サービス法の成立)
- 4. 自助・協助・公助の連携と地域福祉

せたがや福祉区民学会第2回大会 基調講演

「区民とともに歩む 地域福祉を求めて」

田中荘司氏(日本大学客員教授)

私の職業人生の中でも自分なりに今日まで学んできたつもりですが、途中で思い出のあるようなことを中心に30分くらいお話しさせて頂きたいと思っております。

最初に自己紹介を兼ねながら、福祉との出会いということですが、もともと私は、福祉に心がけたというつもりは当時ありませんでした。たまたま昭和23年に民生委員法というのができまして、親父が昭和24年ごろに民生委員をやっていたことがございます。夜が多かったのですが、生活に困った人やアルコール依存症の息子で家が混乱している家庭の奥さんが裸足で逃げ込んで来たりとか、なんとかしてくれというようないろんな相談に来ているのを時々覗き込んで聞いていたことがございます。このような事で、こういう人の相談に乗るという、今で言うボランティア活動があるという記憶が強く残っていました。

いよいよ学校に行く年齢になった時に、当時は家父長制度が田舎では強く残っていまして、お前は福祉をやれと親から命令が下されました。私は、エーッという感じで想像だにしていなかったのですが、当時はまだ福祉といえば慈善事業という考え方が地域社会には強く、なぜそのような分野に行くのかと非常に葛藤がございました。大学でも1年生、2年生の時はやる気がなく成績が悪かったですね。他の大学を内緒で受けようと思っていたのですが、浪人というのは地域から恥さらしだから絶対だめだと言われまして、しぶしぶ自分の生きる道は福祉のほかないという風に切り替えたのが大学の3年生、4年生でございます。勉強はそれ以降は全部Aで修めた記憶がございます。

たまたま都内で最初の求人が大学にあり、受けたら受かってしまったので、若いうちは東京で遊ぶかと言う風にも思っていたのですが、反省し大学を出てから勉強はいたしました。当時はケースワークとかグループワークといった、コミュニティオーガニゼーションですが、アメリカの授業を訳した先生から講義を受けたという状況であまりピンとこなかった。勉強しても身につかなかったので、先生に相談をしたところ、アメリカに行く以外にないのではないかという事になり、当時のGHQの民政部に勤めておられたウイルソン氏の紹介で、昭和35年に二

ューヨークに勉強に行きました。私は、大きな希望をもって福祉をやろうと思っていたということではなかったのですが、次のような転機がございました。

配布資料の2番目に書きましたが、それは官僚主義、今は民主党の政権になって分が悪いですが、官僚、官僚と徹底的にたたくという時代になっていますが、ニューヨーク州立のリハビリテーション病院でして、1900年に世界で最初に設立されたリハビリテーション専門の病院です。そこで徹底的に鍛えられました。リハビリテーションプロセスにおける医療ソーシャルワーカーの役割、という事で勉強に行ったのですが、それだけにとどまらずいろんな勉強をいたしました。病院でボランティアの方々が積極的に州立病院を支えているという状況に直面し、そういうことに関心を持ったり、当時、レクリエーションは大学で教育しており、レクリエーション士という資格がアメリカにはありまして、PT(理学療法士)やOT(作業療法士)とよく一緒にケアというかコンビを組んで、治療的なリハビリ、レクリエーション士というような職種の人とも関わって幅広く勉強しました。

そして、日本に帰国し、現場のリハビリ施設に勤めて愕然としたことがございました。それを「社会福祉学会」で昭和41年頃に発表しました。日本では、管理部というか事務部の人がトップになっている。事務系の人が組織全体、施設全体を管理する。そういう仕組みです。ソーシャルワーカーのような職種の人は、第一線で一生懸命に障害者と仕事をしているのに、ああしろこうしろと事務系の人から言われるのです。そういうことはアメリカではあり得ないことです。アメリカのリハビリ病院の中心は医師を中心として、いろんなパラメディカルのスタッフが病院を動かしています。ですから、事務系の人は専門職種が本来の目的を達成できるように側面から、裏方から支援する。そういう役割を担っているんです。その上下関係やポストの違いなど、日本では事務系の人が一番偉いんですよ。事務職が専門職を上からああしろ、こうしろと指示をする。アメリカとは全く違う、逆なんですよ。

そういう事で「官僚主義と専門主義」という事を学会で発表しました。ひどすぎる、日本は官僚天国だと発表したんです。それが幸いしました。たまたま厚生省の偉い人が聞いていたんです。そんな人間が厚生省にいるのか、現場にいるのかということで、本省に引き上げるということになりました。でも、私はその人と、行きたくないと喧嘩をしました。1年間交渉があって、嫌だと言ったんですが、いずれ障害者分野で障害者福祉専門官というポストを作るからとにかく行ってくれと言われ、しぶしぶとその隣の老人福祉課というところに行きました。8

割は障害者と高齢者は必要としているサービスが同じなんですね。そんなことが少し良かったのかなと思っていたんですが、昭和40年代はまだ日本は限定福祉と言われている時代でした。これは所得税の非課税世帯の人にしか福祉サービスを提供しないという、所得の比較的少ない人だけを福祉の対象にしてやっていたという時代です。だから松下幸之助のような人でも、金持ちの人でも介護サービスを必要とする時代があるわけです。広く所得に関係なくサービスを提供するように、この一般福祉化をするということが行政上の最大の課題だった。そういうような時代ですので、一生懸命それをやりました。

特に専門官になってからは、所掌事務上の仕事が3つあり、一つは課の職員に対する専門的・技術的指導に関すること。事務職の人たちに技術上の指導をする。例えば政策を作る場合にどういう仕込み方をするのか、どういう風に考えて作るのかというような指導をする。

もうひとつはこの5年先、10年先、15年先の福祉をどうもっていったらいいかということですね、専門的事項に関することで、お前は専門官なんだから月に1回役所に来ればいい、給料日に1日来ればいい、あとは来なくていい。とにかく日本をどういう風にもっていったらいいか、それだけを考えればいい。考えたらそれを具現化するために補助金というものがあります。補助金というのは、例えば厚生科学研究費というのがあり、それを使って立証、研究調査をする、そういう仕事をやってほしいと。もうひとつは中央社会福祉審議会というのがあり、その中に常設の分科会で老人福祉専門分科会というのがありました。その審議会を動かしてほしいという事で、審議会の委員の任命からなにから全部やりました。そういう3つの仕事をずっとやって来ました。

今日お話しするのは、前段として昭和56年の動きです。私も審議会の意見書を何本も書きましたが、非常に批判があるんですね。昭和56年「今後の在宅老人福祉対策のあり方」、それを2年くらい検討しておりましたが、高官からはもう2年もやっているんだからもう報告書を出してくれと言われ、急遽"今後"ではなく"当面の"に切り替えて出しました。実は公表しておりませんが、当面という事でずっと検討した中身は、市町村が実施したとして、在宅を実施する責任者が区市町村という事を明確に打ち出しております。これは国の段階では初めてです。それから居宅処遇の原則、これも打ち出しました。高齢者分野では問題が起きると、老人ホームに入ってもらって一件落着という解決の方法が中心だったのですが、そうではなく、心身に障害があっても家族・友人・知人等との人間関係を保ちながら地域社会で生活できることを第一義的な位置

づけにするという事です。そういう施設対策と在宅対策の関係を逆転させるという事を書いたわけです。

当面ということになって消えてしまったのは、補助金制度をやめるということを書きました。これは弊害を仕事をしながら非常に感じていました。区市町村が勉強していただいて、そして責任をもって区市町村がやるというような事をめんめんと書いたわけです。

そして、53年にデイサービスという事業を作りました。54年にショートステイという事業を作り、大かた欧米の施策の数においては負けない数を作りました。ただ、一番問題なのはホームヘルプサービスでした。これがあまりにも大きな施策で、社会に対して影響力が大きいものですから、意見書の中で所得税を払っている方に対しても派遣するという派遣対象の拡大を書きました。そういう審議会の意見書を書かないと大蔵省はなかなか認めてくれないんですね。だから悪い意味ですが、審議会の名を使って施策の拡大を図る、というのは常套手段でよく使う方法なのです。

そのようなことが引き金になり、翌年ここに書いてあります総合福祉法を作ろうと1年間検討しました。なぜこんなことを検討したかというと、当時の社会局というのは大人に対してサービスを提供する局でありましたが、その筆頭の課長がこういうことを言ったのです。現行の各種の法律とか制度を無視して、本来あるべき在宅の方法について検討してくれという命令が出まして、中心になって検討を重ねた結果ですが、老人福祉法とか障害者福祉法とか各法別での立法というものの弊害が多すぎるので廃止する、市町村が責任をもってやるという前提ですので、法律と法律の谷間があり、それがうまくいかないのです。

例えば実際に議論をしたのですが、お年寄りの中にも視覚障害のお年寄り、 聾唖障害のお年寄りがいらっしゃるんです。これを法律の中できちんと位置付けてほしいという要望が非常に強かったんです。しかし、そんなことをしたら法律の中に施設制度の種類をたくさん作ることになる、そんなこともうやめたらどうだと。もし作るとますます差別化することになる、どんな障害でも一緒でいいんじゃないのという考え、その方が高齢者のニーズに合うんじゃないか、ということです。ですから、そういうのは法改正でいちいち書かない、でも実際にあるんですよ、聾唖老人ホームというのが全国に5、60あるんです。予算上でも+αでつけているんですよ、今だに。

それから、こういう問題がありました。ある県に出張した時にどうしても見てほしいと言われて、山奥に連れ出されたんです。そしたら、コロニーでした。山の中に知的障害者を中心としたコロニーができていた。知的障害者の作業能

力というのは、非常にテンポが遅いんです。老化が激しいんです。エイジングが早いんです。だから40代くらいの知的障害者の方が作業しているのを見ていると、全然テンポが合わなくて他の年代の人と作業が狂っちゃうんですね。特にアッセンブリングという作業があると、そこで機械が止まるように作業が止まっちゃう。そういう状況からして、40代くらいになると ADL が低下して高齢者と同じレベルになる。

それで老人福祉法で40代以上の人を高齢者とみなして、障害者福祉法でなく老人福祉法で対応してほしいという県の要望でした。それで私に現場を見せたんですね。でもそれは無理でしょ。高齢者の施設の職員に、知的障害に対する知識と技術を勉強してもらうためには最低10年かかる。それほどの時間を費やしますし、当時は措置費でしたので措置費の単価を見ると知的障害者の方が高いんです。お年寄りは単価が低いんですが、刑務所よりは高いんですよ。国会質問で、刑務所の食費の単価よりも老人ホームの食費の単価が低いことは何事だと質問が出ました。法務省で聞いて答弁を書いたのですが、老人ホームの食費の単価は刑務所の食費の単価より高かったという記憶があるのですが、むしろ障害者福祉法のなかに高齢者法というような仕組みに作り替えた方が、たいる障害者福祉法のなかに高齢者法というような仕組みに作り替えた方が、施設経営の点からいいのではないかという事で検討し、なおかつ問題があるとすれば改めて老人福祉課に申し入れをしてほしいと話をした経験があります。

障害者とか子どもとか大人とか別々の法律はやめよう、一本にしようという 考え方に検討が進みました。それから、補助金という制度、これは大変なんで す。人によってはご経験があると思いますが、適正化法という補助金に関する 法律がありますが、厳格に区分していて流用ができないんです。弾力的に予算 を運用するという仕組みになっていないんです。

ホームヘルパーの給料という積算の項がある、そして今度はホームヘルパーの研修という別の項であるんです。これを市町村レベルで、実情に応じて自由に流用して使いたいと市町村は希望するんです。だけど適化法という法律があって厳格で流用まかりならんとなる。だから動かないんです、予算の執行がうまくいかない。ものすごい弊害があるという事はわかっているんです。もうそれは廃止する、補助金制度は廃止して、地方交付税回しにするという検討をやりました。老人や障害者の法律を廃止して、総合福祉法という形でもっていく。今の社会福祉法もできが悪いんです。あれはいまだに各福祉法で何々事業、何々事業と書いてあるものをまた社会福祉に書いている。あんなばかげたことはやらない方がいいですよ。二重になっている。

補助金制度を廃止し、地方交付税回しにする。なんにでも使えるというふうにするということです。私は当時社会局でしたが社会政策局に改め、国の責任は政策中心で行く、補助金行政はやめるという発想だったんです。連携は取っていなかったんですが、スウェーデンは当時同じ考えで、そうしたんですよ、偶然にも同じ年に。スウェーデン、北欧はそうですが官僚中心なんです。中央集権的だったんです。4つくらいの法律をスウェーデンは廃止して、社会サービス法一本にしてしまった。その中に、例えば老人の部分は4条くらいしか書いてないんです。適正な住居を提供すること、介護が必要になったら必要なサービスを提供すること、それだけですよ。

そんな細かい施策をつくってこうしろなんて言わず、市町村が好きにやりなさいという作り方なんです。それは枠組法といいますが、たまたま日本もそういう考えに至ったんですね。その後、総合福祉法というものを作って各課の了解をとったうえで審議会にかけて法改正というスケジュールまで作ったんです。しかし、ものすごい抵抗が各課からありました。権限がなくなっちゃう、公務員の仕事は仕事をたくさん増やして、そのために予算をたくさん取ることが公務員の仕事だということを教えられてきたのですが、もう時代に合わないという事で報告書を作ったわけです。それがここのレジュメに書いてある幻という総合福祉法ということだったんです。うまくいくと大人の福祉分野だけでなく、子どもの児童家庭局というのがあるので、児童福祉法も廃止するという話しをする。そういうやり方を考えていました。抵抗はものすごく強かったですね。なかには20年早すぎる、20年先なら賛成するけれど今はだめだと、半分くらい理解してくれた偉い人もいたんですがね。

これが実現したら福祉社会はガラッと変わったと思います。当時、特に昭和56年の「当面の在宅老人福祉対策のあり方」についての背景説明を区市町村の職員に話しをしてほしいといくつかの県から依頼されてしゃべりに行きました。しかし、県の反応、市町村の反応はこうでした。「国は福祉から逃げるのか。」、「福祉を国はやらずに市町村に押し付けるのか。」そういう質問ばかりでした。市町村の職員はレベルが低いなと思いました。これでは到底先の福祉はできない、そういうふうに思った。

今日は資料にはできませんでしたが、報告書的なものを作ってあるんです。 1か月前に古巣に行って公表するよと言いました。今まで公には公表しなかっ たんです。けれども、せたがや福祉区民学会というのがあって、そこで話して くれということがあったので、封印してあった25,6年前の考え方を、当時、 国の一部の人間が実現しようと努力していたという事実があったことだけは知 っておいて貰おうということを話すよと、了解をとっておこうと行ってみたら、「えっ!そんな報告書があったの?」と知らないんですよ。地下の倉庫にしまってあるのかなあ、探してみたらどうって言ったのですが、そんなような幻に終わりましたが、そんな動きをしたということです。

レジュメの4番目は 自助、公助、協助となっていますが、協助についてお話しておきたいのです。協助というのは、これは大変なことです。区民も福祉活動に責任を持つということです。区民はサービスを受ける受益者という立場で終わると考えたらこれは間違いです。受益者であると同時に、区の全体の福祉の中で責任を果たすという役割が必ずでてくる。

スウェーデンの福祉の役所の人と議論した時に、これを言ったんです。昭和57年に社会サービス法を作って弊害が出ているんです、とスウェーデンの役所は言っていたんです。それは何かというと、市町村がやればいいということになったら市町村で格差がすごくでてきたんです。国が法律上言えないので、地域福祉を進めるという考え方では格差は当然出ると思います。地域のニーズが違い、それに応じて対策を行いますから。だから差が出る。それを踏まえて、区民の人たちが自分たちも責任を負うという心構えを持ってもらわないと困るんです。そこまで高めてもらわないと。

サービスを受けるだけの立場で終わらせようという考えでは地域福祉は発展しません。この区民学会の各分科会の資料を読ませてもらいますと、福祉従業者の人の研究発表が中心になっている。いずれは区民の人たちが、区民から見た住民福祉活動という事での発表を当然されなければいけない。区民の人が区役所とか福祉団体がサービスを提供していることへのクレームをつける発表が当然ないといけない。こういうところまで区民学会が発展するようになれば本物になる。もっと系統的にお話ししたかったのですが、この辺で終わりにします。



実践研究発表および 分科会一覧



実践研究発表および分科会一覧

1. 子育で・母子支援 (3501教室)

進行役・助言者 友田篤 山岸道子

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	根津 明子	東京都市大学人間科学部	地域で育ちあうために-学内子育て支援センター 「ぴっぴ」からみた親子たち-	13:10
2	前田 佐知子	世田谷区社会福祉事業団世田谷区立パルメゾン上北沢	「世間」のまなざしから「支援者」のまなざしへ 〜母子生活支援施設から見えてきたこと〜	13:35
3	柿原 彩香 金子 絵里香	日本大学文理学部 社会福祉コース	児童養護施設学習支援活動「桜んぼ塾」について	14:00
4	寺西 美恵子	社会福祉法人嬉泉 子育てステーション桜新町発達相談 室	地域における「発達相談室」での取り組みと課題	14:25
5	坂田 由紀子	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	めばえ学園における療育の内容	14:50
6	原 眞 齋藤 至行	世田谷区社会福祉事業団世田谷区立パルメゾン上北沢	児童福祉と高齢者福祉の仕事にかかわって -対人サービスの視点から考察する-	15:40

2. 施設での生活の充実 (3502教室)

進行役・助言者 村田幸子 橋本睦子

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	山﨑 千恵 伊藤 好美	介護老人保健施設 うなね杏霞苑	「施設で楽しむ郷土料理について」	13:10
2	磯野 かおり 藤原 ふさ子	世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム上北沢ホーム	主体的でいきいきした生活の維持を目指して 〜特別養護老人ホームだからできる経管栄養利用者 のケア〜	13:35
3	陸田 光昭三浦 好顕	社会福祉法人友愛十字会 砧ホーム	いつも笑顔で~安全・安心を守りたい~ 利用者に直接関わるアクシデント(介護事故)への 取り組み	14:00
4	原 初枝 須田 美恵子 櫻田 和子 七邊 玲央奈	介護老人保健施設 ホスピア玉川	高齢者に対するレクリエーションの効果の検証	14:25
5	吉永 美和	日本園芸療法普及協会	高齢者施設における園芸療法の実践	14:50
6	井上 美加	デイホーム桜丘	老人のためのぬり絵作り ーデイサービスでの実践報告ー	15:15
7	那須 康樹 市川 龍太郎 星 希美	世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム芦花ホーム	「健口体操に呼吸リハビリを取り入れたその効果に ついて」	15:40

3. 認知症ケア/介護と医療の連携 (3504教室) 進行役・助言者 瓜生律子 和気康太

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	727111	福) こうれいきょうデイホーム三宿	認知症対応型デイサービスの新たな取り組みと今後の課題 「夕食を食べてから、帰ろう!」	
2	白石 晶紀 藤倉 義之 永嶋 千秋 橋本 浩	世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム芦花ホーム	入所施設での、認知症高齢者の方への新たなアセス メントシートの工夫 ~職員の気づきの大切さ~	13:35
3	市川 裕太	グループホームかたらい	認知症になっても住み慣れた場で安心して暮らし続けるために 〜医療と介護の連携による重度の認知症の人への誤 嚥防止の取り組みとこれからの嚥下機能維持に向け た認知症支援のあり方を考える〜	
4	笠原 康右	世田谷区社会福祉事業団デイ・ホーム太子堂	若年認知症者への通所介護サービスとは 〜求められる役割について〜	14:25
5	鈴木 環	駒澤大学社会福祉学専攻	小児がんの疾患特性に基づくMSW介入の在り方に関す る考察	14:50
6	石井 ひろみ	ほっとケア	心を近づける介護と医療行為の実際 「訪問介護に役立てるALSの理解と援助の方法」の研 修報告	15:15
7	片岸 美佳	世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションさぎそう	訪問看護ステーションとグループホームが協働して 行った看取りへの取組み	15:40

4. 家族(介護者)支援/地域支援 (3506教室) 進行役・助言者 辻本きく夫 長谷川幹

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	森本 真知子	世田谷社会福祉士会	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に 及ぼす影響	13:10
2	禎 真奈美	世田谷区社会福祉事業団訪問看護ステーション北沢	家族の力と訪問看護の役割 -家族生活力量アセスメントスケールを用いた評価 と家族の言葉から-	13:35
3	瀬田 みゆき 落合 美夏	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム (ショートステイ)	上北沢ホームショートステイの新たな役割 ~本人に焦点をあてたサービスを通して~	14:00
4	花野 悠 山本 喜和子	駒澤大学社会福祉学専攻	知的障害者授産施設の今とこれから - 実習体験を通じての考察-	14:25
5	高橋 慶子竹上 秋彦	音楽療法実践グループ 宙(そら)	音楽療法の可能性《「デイ・ホーム芦花」K氏との出 会いを通して》	14:50
6	西村 誠	社会福祉法人嬉泉 世田谷区発達障害相談・療育セン ターげんき	世田谷区における発達障害に関わる地域支援	15:15
7	稲垣 清一 池田 貴哉 浜山 亜希子 山北 順子 山本 恵理	砧地域合同地区包括ケア・医療連携 会議実行委員会	認知症になっても安心して暮らせるまちづくり 〜顔の見える関係づくり〜	15:40

	5. 地域で支える/ボランティア (3508教室) 進行役·助言者 植田祐二 小澤弘			
	発表者 所属		テーマ	発表時間
1	森川 敦子 新津 紀子	世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム上北沢ホーム	結ぶ つながる 施設と地域 〜上北沢ホームとボランティア〜	13:10
2	太田 恵津子	世田谷ボランティア協会 代田ボランティアビューロー	セラピードッグカフェ「ころん」の活動について	13:35
3	三浦 覚 板垣 達也	特別養護老人ホーム さつき荘	ボランティア1000の取り組み~人と人との繋がりが起こした相乗効果~	14:00
4	高久保 道子	ふれあいいきいきサロン「豪徳寺コス もれの会」(社会福祉法人世田谷区社 会福祉協議会)	「私たちの活動の強み」~長く続いている秘訣~	14:25
5	小山 直美 鈴木 悠美	日本大学文理学部 心理学科、社会学科 社会福祉コー ス	学生が関わる国際支援の在り方について	14:50
6	矢野 美紀代	世田谷区社会福祉事業団訪問看護ステーションけやき	地域における看護師による「見守り訪問」の役割と 今後の在り方 一全高齢者実態把握事業(すこやか訪問)の実践から一	15:15
7	植田 祐二	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 ケアセンターwith	デイサービスにおける高次脳機能障害者の商店街を 活用しての回復プログラム	15:40

6. 学びあい、人材育成 (3509教室)

進行役·助言者 山田祐子 和田敏子

	発表者	所属	テーマ	発表時間
1	佐々木 哉江	世田谷区社会福祉事業団世田谷区立パルメゾン上北沢	あの「すぐ辞めた若者」が実習生だった頃 〜働く イメージが持てる実習を目指して〜	13:10
2	荒木 めぐみ	薬局成城ファーマシー祖師谷店	見てさわれる在宅医療の研修	13:35
3	後藤 恵美	奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家	トレーニングパートナーの人財共育報告 ~"桜梅桃李"それぞれの花をたくさん咲かせよう~	14:00
4	山本 史織	昭和女子大学福祉社会学科	学生ボランティアの活性化方策に関する研究-昭和 女子大学学生ボランティアコーディネーターの課題 -	
5	山田 宜廣 鈴木 サカエ 船橋 昭夫 平野 タカ子 金子 利治	生涯大学(世田谷区社会福祉協議会)	33期福祉学習・体験・利用コース(2年間)の出会い と学生体験の共有	14:50
6	宮川 英子	世田谷介護サービスネットワーク 訪問介護連絡会	せたがや訪問介護連絡会の設立と活動について	15:15

	7. 福祉	環境 (3510教室) 進行役·助言者 加藤美枝 長尾譲治		
	発表者 所属		テーマ	発表時間	
1	簑田 日登美 澁谷 和子	NPO法人世田谷福祉住環境コーディ ネーター研究会	「介護保険の住宅改修」の現状と問題点 -世田谷区介護保険住宅改修の事前訪問調査分析結 果からの考察-	13:10	
2	稲垣 敦子	日本大学文理学部 心理学科社会福祉コース	実習中に見てきた福祉環境 〜福祉機器の歴史〜	13:35	
3	丸山 龍太	駒澤大学大学院	学大学院 わが国におけるセーフティネット機能の脆弱性		
	渡部 洋子 坂本 啓之	世田谷区役所世田谷保健所感染症対策課	高齢者施設で結核患者が発生してもあわてないために 〜世田谷区では年間71人の後期高齢者が結核を発 病しています〜	14:25	
5	能 俊彦 柿崎 八重子	生涯大学(世田谷区社会福祉協議 会)	「消えた老人」問題について 〜社会全体の絆であんしんな社会を〜	14:50	
6	赤城 愛美 龍尾 怜子 戸谷 治佳 古川 悠一	日本大学文理学部 心理学科、社会学科 社会福祉コー ス	浅草バリアフリー実態調査 - 車椅子体験を通して分かった見えるバリアと見えないバリアー	15:15	
7	三井 美穂子	NPO日本トラベルヘルパー協会	高齢者への外出支援サービスの必要性について 〜温泉リハビリ外出支援バス事業を通じて〜	15:40	

第1分科会 子育て・家庭支援

進行役・助言者 : 友田篤(世田谷区発達障害相談・療育センター長) 山岸道子(東京都市大学人間科学部児童学科教授)

	発表者	所属	テーマ
1	根津 明子	東京都市大学人間科学部	地域で育ちあうために-学内子育て支援センター「ぴっぴ」 からみた親子たち-
2	前田 佐知子	世田谷区社会福祉事業団世田谷区立パルメゾン上北沢	「世間」のまなざしから「支援者」のまなざしへ 〜母子生活支援施設から見えてきたこと〜
3	柿原 彩香 金子 絵里香	日本大学文理学部 社会福祉コース	児童養護施設学習支援活動「桜んぼ塾」について
4	寺西 美恵子	社会福祉法人嬉泉 子育てステーション桜新町発達 相談室	地域における「発達相談室」での取り組みと課題
5	坂田 由紀子	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学 園	めばえ学園における療育の内容
6	原 眞 齋藤 至行	世田谷区社会福祉事業団世田谷区立パルメゾン上北沢	児童福祉と高齢者福祉の仕事にかかわって -対人サービスの視点から考察する-

地域で育ちあうために ―学内子育て支援センター「ぴっぴ」から見た親子たち―

東京都市大学人間科学部 根津明子

1. 活動・研究の目的

本発表の目的は、子育て支援センター「ぴっぴ」が目指している役割と、その背景にある基本的な考え方を示すことにある。「ぴっぴ」は大学(東京都市大学)の中にあるが、このことが利用者に「安心」、「信頼」のイメージを与え、地域の親子が日常的に安心して活動できる、広場としての役割を果たしているようである。さらに、「ぴっぴ」で親子双方が安心してのんびりと過ごすことが、他者と無理なくかかわるきっかけとなり、そのかかわりの中で、親同士が自身の子どもと他者への緩やかなまなざしを持てるようになると予測される。良き人間関係を育てにくいといわれる現代社会において、先のことは結果として、子どもと親、子ども同士、親同士の関係を育てる絶好のきっかけになっていると考える。

2. 現代の子育て環境

すでに言い古されたことではあるが、21世紀に入り、生活面でも急速な技術革新が進んでいる。そのため、日々の生活は消費化・省力化がますます進み、お金さえあれば、他者とかかわることなく日々を生きていくことが出来る。つまり、自分の手で食事を作る、洗濯をする、掃除をする、買い物をするという日常行為が全てお金で賄える。子育てさえ、その気になればベビー・シッター任せにできる。そこまでする人は少ないが、直接他者とのかかわりを持たずに生きていくことが出来るのが現代である。このことが、人と人との関係性を希薄にしている。言い換えれば、意識してかかわりを持とうとしない限り、他者との良き関係性を育てることが難しいのが現代社会といえる。

ところが、情報や事業者サービスでは賄えないことが、子育てや介護にはある。子育てと介護は、当事者の意識の有無にかかわらず、実際に近隣の良き人間関係なくしては立ちいかない。子育てに関して、どういう点でそう言えるかと言えば、親が、<u>互いを事例として自分の子どもへのかかわりを振り返る</u>ということである。他者の子育ての事例を見ながら自分のやりかたで良いと思う納得、<u>こんな方法もあるのかという発見、お互いさまという気づき</u>を得、さらに、そのことがきっかけで親同士、子ども同士が親しくなったりする。ここに情報、サービスにはない互助が生まれる。このとき重要なことは、親子が自力で気づき、自力で関係性を育てていくということである。今、子育てに関する講座は年々ふえている。にもかかわらずごく自然に、当たり前のように先のことを実現することは、ますます困難な状況にある。

3. 関係を育む条件とは

以上のことから導き出せることは、すでに人間関係が希薄化している「地域」の中で、誰もが気楽に集まれる場所、そして、そこで無意識のうちに他者(他の親子)に、自分から目を向ける機会を得、発見し、「そうか、これでいいのだ」と得心出来る場所が必要ということである。誰かに強制されるのではなく、教えられるのでもなく、親子ともども自分から気持が動く、体が動くという場所が必要といえる。「ぴっぴ」はその一例と考える。

<質疑応答>

Q1:今の発表で一番言いたいことはなんですか?

A1:小さな赤ちゃんでさえ、なにかをやりたくなるような場所が必要ということです。

Q2: ぴっぴの中でプログラムをやることはありますか?

A2:ないですが、学生たちが絵本を読み聞かせたりすることはあります。



世間のまなざしから支援者のまなざしへ ~母子生活支援施設から見えてきたこと~

パルメゾン上北沢 前田 佐知子

母子生活支援施設は、社会福祉施設の中でもただ一つの、母と子を単位として支援する施設です。入所の理由は様々ですが共通して『家族関係の中で傷つく』体験を持ちます。心に深い痛みを持つ方々への支援を通じて私たちが学んだ、母と子への向き合い方をお伝えします。

- 1、自分たちの傾向を知る
 - ・他者との関係を失いながら生きる日本人
 - ・弱まる『受け入れがたいものを受け入れる力』
 - ・世間の目~その目に映る離婚・虐待・DV被害・依存等
 - しつけをしたがる私たち
- 2、母と子を理解する
 - ・入所の理由(平成20年実態調査報告より)
 - ・子どもたちの置かれたハードな状況
 - ・向かう母たちへの非難~母たちもかつての『ハードな状況に置かれた子ども達』
 - ・家庭が子どもたちに与える影響
 - ・母と子の傷つきやすさ~2度目のハチのこと~私たちから傷つけない
- 3、見えてくる『母と子に必要な支援』
 - ・いのちと心を守る場所
 - ・『大切にされる』体験
 - ・大人モデル~母性と父性
 - ・まず癒しそれから自立
- 4、私たちのたどり着いた『受容』
 - ~受容の心を支援のスタンダードにしていきたい
 - ・母も子も『受け止める』
 - ・受容が変える物事の見方 ~その目に映る 離婚・虐待・DV被害・依存等
 - ・職員との関係から生まれる『他者とつながる力』
 - ・世代間の負の連鎖を止める

<質疑応答>

- Q1 全国の母子生活支援施設では、どの施設も同様の質の水準を保っていますか?
- A1 差はあると思います。そのことは、全国母子生活支援施設協議会でも課題と考えています。そして、全国的な質の底上げに取り組んでいます。世田谷区でも、3母子生活支援施設交流会(かわだ・ナオミホーム・パルメゾン)を開くなどして努力を重ねています。パルメゾンもまだまだ改善出来るところがあります。
- Q2 (パルメゾン上北沢内の)連携について教えてください。
- A 2 職場の仲間同士で情報を常に共有するなど、連携をしています。



児童養護施設学習支援活動「桜んぼ塾」について

日本大学文理学部社会福祉コース:柿原彩香、金子絵里香

活動の目的・意義

児童養護施設学習支援活動「桜んぼ塾」は、「学習塾」ではあるが学習成績の向上のみを目的とするのではなく、子どもたちが継続して学習に取り組む習慣作り、自ら学習計画を立て計画を達成することによる充足感、勉強ができるという自信を持てるようになることを目的とする。さらに、自信を持つようになることで学習意欲の向上にも繋がると考える。

また、年齢の近い大人である大学生と関わることで、子どもたちの刺激 となり良き大人のモデルとなる。

活動内容

児童養護施設学習支援活動「桜んぼ塾」は、中学生を対象に毎週 1 回、90 分間学習に取り組む。学習計画を立て、計画に沿って学習に取り組んでいくことで、子どもたちが自ら学習し、自分で決めて勉強しているという意識と達成感を持ってもらう。また、学習に使う教材は、毎週学生が手作りの物を用意している。プリント作りでは「誰でも7割~8割は解けるもの、2割~3割は次に繋がる問題」「やる気のでる工夫」を常に心がけながら作成。同じ教室内で複数の子どもたちが学習しているため、子どもたち自らの意思で来て、学習に取り組めるような環境作りをこころがけている。

職員の方々との連携をとるため、毎週連絡帳を記入し、子どもたちの学習の様子等を職員の方にも伝えている。また、半年に1度、職員の方々と学生達で反省会を開催し、活動の様子や今後の活動に向けた意見交換を行っている。

結果と考察

高校進学の意思の低かった子どもや、勉強に対してあまり意欲的でなかった子どもも、「ここでなら勉強が頑張れる」と自らの意思で来て、90分間集中して学習に取り組んでくれるようになった。

中学1~3年生までの同じ教室内で学習をするので、中3の子どもたちが受験に向けて努力する様子が中1・2の子ども達に良い刺激となった。

課題

より効果的な学習支援として塾以外での交流や方法などのスケールアップが必要と考えている。また、学生の人数の関係から高校進学後の子どもたちのフォローができない。大学を卒業したメンバーにも、継続してボンランティア等に参加する機会を設けるなどの必要がある。

<質疑応答>

- Q1 勉強に意欲的ではなかった子が好きになった秘訣はなんですか?
- A1 その子ができるところからや、やりたいと思うこと、興味のあることから勉強に取り組めるように、プリントは子ども一人ひとりに合わせて手作りしています。そのプリントが、通うごとに増えていくことで、子どもの自信にもつながります。
- Q2 そこで育った子どもが指導することはありますか?
- A 2 子どもたちは、中学校を卒業すると、アルバイトをするため、さくらんぼ塾に通っていた子どもたちと一緒になって中学生に教えるなどの時間は作れない状況にあります。でも、そのようなことができたり、寮の中で自然に教える時間があると、こちらとしてもうれしいです。
- Q3 学生は何人いますか?
- A3 20人程です。子どもは7名程度です。
- Q4 子どもは自発的に来ているのですか?
- A 4 子どもは、自らの意思で自分の生活する寮からわざわざ足を運んで大学に来ています。さくらんぼ塾に通うことは、強制的ではなく、子どもたちにさくらんぼ塾の約束事や方針を理解し、納得した上で通うことを決めるため、とても自発的です。学習時間中も、子どもたちは、1時間30分の時間の中で、一生懸命取り組んでおり、とても嬉しいです。



地域における「発達相談室」での取り組みと課題

子育てステーション桜新町発達相談室:寺西美恵子

世田谷区では、区内 5 か所のそれぞれ駅からほど近い場所に、「あそび」「そうだん」「あずかり」「ほいく」の 4 つの基本機能を据えた、多機能型子育て支援拠点施設「子育てステーション」が設置されています。その中に「発達相談室」があります。世田谷区では発達障害児支援基本計画(平成 20 年 8 月)に基づき、発達障害への取り組みを行っています。発達障害の支援を推進する中核的な拠点施設として「世田谷区発達障害相談・療育センター」があり、「発達相談室」はそのブランチとして位置づけられています。

社会福祉法人嬉泉では、世田谷区からの委託を受け、「世田谷区発達障害相談・療育センター」とともに、「桜新町」「烏山」「成城」「梅丘」の 4 つの相談室の業務運営に当たっています。

「子育てステーション桜新町発達相談室」は桜新町駅前にあり、平成22年4月1日に開設しました。療育室・相談室各1室の小さい相談室ですが、開設前より62件の予約が入り、開設と同時にフル稼働して対応してきました。その後も利用希望者は増え、すでに療育は待機状態となっています。具体的な事業内容は、発達障害やその疑いがある児童(18歳未満)とその家族のための相談と療育、さらに関係機関との調整や個別訪問、巡回支援等を行っています。

発達障害のある子どもは、物事の理解や感じ方に種々の特性があり、その特性から日常いろいろな困難や苦労を抱えているにもかかわらず、それが周囲から見てわかりにくく、理解が得られにくい状況にあります。一方で周囲の理解や環境の変化により、本人や家族の困難な状況が目に見えて改善することもあります。子どもの自然な発育を支えていくために、なるべく早い時期に適切な理解と対応が可能となるよう、ご家族の支援や関係機関との連携に努めています。

現在、相談・療育の希望者が後を絶たない中で、また、世田谷区の発達障害の支援を進めていく上で、地域にある相談室として、今後どのように機能していくのがよいかが課題となるところです。

- <質疑応答>

- Q1 就学前のお子さんが多いのは、何か関係性などはありますか?
- A1 子育て世代が多い地域ですし、駅に近く、小さいお子さんを連れていらっしゃるのに便利なためだと思われます。
- Q2 18歳以上の方に対しては、どのような対応になりますか?
- A2 世田谷区発達障害・療育センター (げんき) で成人の方の相談を承っておりますので、そちらにご案内しています。



めばえ学園における療育の内容

子どもの生活研究所 めばえ学園:坂田由紀子

◆子どもの生活研究所めばえ学園(以下、めばえ学園)は、1980年4月1日に東京都より認可を受けて開設された「知的障害児通園施設」である。定員は30名であるが、児童福祉法の改正に伴い措置制度から契約制度へ移行したこと、在籍する一割近くの児童が保育園または幼稚園との併用、併行通園をしていることから、在籍児童数はここ数年、平均して33~35名となっている。

平成 22 年度 11 月現在は、2 歳児~5 歳児の 35 名の児童が在籍している。また、めばえ学園は集団保育を基本とし、年度ごとにクラスを編成し運営を行なっている。クラスの構成等については、在籍する子どもの状況を把握、考慮した上で検討、決定している。平成 22 年度のクラス編成は以下のとおりとなっている。

なごやか組:入園2年未満の2、3歳児の児童7名で構成。

ほのぼの組:入園2年未満の3、4歳児の児童10名で構成。

さわやか組:入園2年以上の4、5歳児の児童16名で構成。

あたたか組 (来年度の集団保育への移行に向けての準備クラス)

: 2歳児、3歳児の児童2名で構成。

- ◆また、めばえ学園では発達上、支援を必要とする子どもへの療育と同時に、その家族への支援にも重点を置いている。子どもの状態や家庭の状況により形態は異なるが、なごやか組やあたたか組においては、日常的に親子保育を実施している。その他のクラスにおいても以下のような家族への支援を実施している。
 - *個人面談⇒年3回程度設定。その他にも必要に応じて随時、実施。
 - *親子保育⇒月1回実施。
 - *保育参観・参加、保育ビデオ参観⇒必要に応じて随時、実施。
 - *療育勉強会⇒年3回実施。
 - *動作法(親子セッション)⇒嘱託講師が月1回来所し、実施。
- ◆めばえ学園は「発達上、支援が必要な子どもたちに対して、安心して落ち着いた生活ができる環境を整え、一人ひとりの発達の状況を捉えて、人との相互関係の中で発達が進むように支援していく」ことを理念として療育を進めているが、療育の段階について、入園(療育開始)して2年未満の児童を「療育初期~中期」段階、入園(療育開始)して2年以上の児童を「療育中期~後期」段階として、各段階に合わせて、クラス編成や環境の配慮、日課の内容等を考慮している。また、発達を支援する上での療育のねらいは以下のとおりである。

|人への安心感を育てる|⇒特に療育初期の段階

人に対応する力を育てる⇒特に療育中期の段階

自発性、主体性を育てる⇒特に療育後期の段階



児童福祉と高齢者福祉の仕事にかかわって 一対人サービスの視点から考察する—

パルメゾン上北沢:原眞、齋藤至行

福祉の仕事には、児童、高齢者、障害者等、様々な分野がある。実に多くの専門機関・資源があり、それぞれに固有の専門性がある。従事する者には、それら専門性と、より高度な技術・豊かな人間性が求められる。従事者には、ある特定の分野に従事する者もあれば、複数の違った分野に従事する者もいる。特に、複数の分野を経験する者には、「異なった」専門性を身につけることが求められる。

発表者2名は、これまで高齢者と児童の二つの分野に従事してきた。その経緯において、我々は、多くの戸惑いや不安等の経験をしてきた。先ずは、それらの経験を挙げ、それらが何故生じているのか、原因について分析を試みる。次に、その「困難」的状況の克服について、その実践とそれに伴う可能性について考察する。また、「異なる」分野ということで、相違点ばかりに注目するのではなく、共通点についての分析も試みる。

今日、福祉の仕事にかかわる者に求められている大きなテーマに「自立支援」がある。それは、「対人サービス」の提供により営まれている。我々は、二つの分野の共通点として、当然ながら、「対人サービス」の実践による「自立への支援」を実感する。「地域福祉」が重要視される今日、地域住民一人ひとりが自立への支援者になることが期待されているが、そのような状況のなか、特に福祉の仕事にかかわる者は、支援者としてのモデルになることが必要である。福祉の機能を、細分化して捉えるのではなく、機能的につながりのあるものとして総合的に捉えることが求められる。様々な分野に携わることは、このような方向に合致している。

生活の場には、無数の視点が存在する。様々な分野における経験・実践が、福祉の 仕事に従事する者の可能性を広げていける環境の構築のために、より生かされていく ことが必要である。

- Q1 (祖母の介護をしていた、という方からの質問) 私が祖母の介護を行っているなかで、「私のことを子どもだと思っているよね?」と言われてしまいました。ケアするうえで、大事にしていることは何ですか?ありますか?
- A1 その方らしく生きるため、ウェルビーイングを目指すことが大事であると思います。その方にとっての支援になっているのか、その方の持っている力を理解して力を育む支援になっているのか、高齢者であれば人生の先輩という気持ちを支援者自身が持っているのか、支援者に都合の良い支援になっていないか等の自己覚知を繰り返しながら実践することが大事と考えます。



第1分科会総括

世田谷区発達障害相談・療育センター長 友田 篤

皆さんお疲れ様でした。第1分科会を担当しました友田と申します。山岸先生と二人で分担させていただきました。

第1分科会は「子育て・母子支援」という分野で6つの発表がありました。

まとめるというのは無理です。というのは、子育てというテーマを理論的な背景から取り上げてくださった発表や、学生さんの発表、母子生活支援施設での大変厳しい状況の中で、本当にいろんなことに正面から向き合ってきちんと日々取り組んでおられる活動、あるいは新しい発達障害という課題に取り組み始めたばかりの発表ですとか、あるいは30数年に及ぶ障害児の通園施設の歴史ある発表など、そんな多様多岐の内容なので、そういう意味でまとめられないということです。

強いて言えば、一番感じたのは、学生さんからベテランの方それぞれですが、「福祉は人なり」とよく言いますが、地域支援ということで地域という物理的なものを考えてもしょうがないので、「人と人との関係の中での支えあい」という意味を考えなければ何の意味もないと思いますが、我々が誠実に着々と堅実に利用者さんに向いながら、自分自身の心のあり様とか、関わる姿勢のあり様を振りかえりながら、誠実に皆さん日々取り組んでそれを重ねているということを感じまして、それが透明な感じですが強い感想として皆さんにお伝えしたいと思いました。



第2分科会 施設での生活の充実

進行役・助言者 : 村田幸子(福祉ジャーナリスト)

橋本睦子(特別養護老人ホームさつき荘施設長)

	発表者	所属	テーマ
1	山﨑 千恵 伊藤 好美	介護老人保健施設 うなね杏霞苑	「施設で楽しむ郷土料理について」
2	磯野 かおり藤原 ふさ子	世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム上北沢ホーム	主体的でいきいきした生活の維持を目指して ~特別養護老人ホームだからできる経管栄養利用者 のケア~
3	陸田 光昭三浦 好顕	社会福祉法人友愛十字会 砧ホーム	いつも笑顔で〜安全・安心を守りたい〜 利用者に直接関わるアクシデント(介護事故)への 取り組み
4	原 初枝 須田 美恵子 櫻田 和子 七邊 玲央奈	介護老人保健施設 ホスピア玉川	高齢者に対するレクリエーションの効果の検証
5	吉永 美和	日本園芸療法普及協会	高齢者施設における園芸療法の実践
6	井上 美加	デイホーム桜丘	老人のためのぬり絵作り ーデイサービスでの実践報告-
7	那須 康樹 市川 龍太郎 星 希美	世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム芦花ホーム	「健口体操に呼吸リハビリを取り入れたその効果について」

施設で楽しむ郷土料理について

介護老人保健施設うなね杏霞苑 管理栄養士 山﨑 千恵 介護老人保健施設うなね杏霞苑 管理栄養士 伊藤 好美

「活動の目的・内容]

介護老人保健施設とは、利用者の在宅復帰を目指す施設であり、機能訓練のリハビリや、日常生活動作の訓練、看護・介護サービス、栄養管理など様々な職種が連携をとって利用者を援助しております。

栄養課では、個々の摂食・嚥下状態にあった食形態の調整や、栄養補助食品の検討、 食事・水分量のチェックによる体調管理、個人の体重管理など、利用者の健康維持の 面でのアプローチをしております。

また、毎日の食事は利用者にとって一番の楽しみの時間でもあります。

当施設では、利用者の要望を少しでも食事に反映できるよう年4回嗜好調査を実施しており、その一つとして平成19年11月より毎月1回のペースで全国の郷土料理を献立の1品にとりいれ、利用者の皆様に施設にいながら故郷を思い出していただきたく実施してきました。提供当日はカードを作成して添えたり、食事の前の献立を発表する際に職員にアピールしてもらったりしております。

[結果]

平成22年11月現在47都道府県中、35県まで提供し、現在も進行中です。

「考察・課題〕

実際誰もが知っている有名な郷土料理はその地域でとれた魚や肉などの食材を使用していることが多く、コストがかかってしまうのが現状です。

コストをかけずにいかにメニューに取り入れるかを考えたり、委託業者の協力を得る ことも必要となってきます。また、作業時間内に厨房で作れるかどうかもメニューを たてる時にでてくる課題であります。

実際の利用者の反応は「故郷を思い出して懐かしかったわ」、「行ったことないけれど美味しかったわ」とか「こんな料理が郷土料理にあったなんて知らなかったわ」など色々な声が聞かれますが楽しみにしてくれております。しかし実際には時間がたつと忘れてしまっている方もおり、嗜好調査では約30%くらいの方は忘れてしまっている結果でした。

食器も今後の課題で集団ですとどうしても使用する器が限られてしまいます。 今後施設でリハビリの一環として陶芸なども取り入れようという試みもでてきております。その際には作った食器などを利用していけたらより食事が楽しいものになるので積極的に取り組んでいきたいと思います。

- Q1 食事をきっかけにして、会話などどのように広がっていきますか?。
- A1 食事は皆フロアで食べているので、食事時は利用者様同士のコミュニケーションの場にもなっています。そこに行事食や郷土料理が入ることで、利用者同士、利用者と職員の間での会話のネタが増えたらと思っています。
- Q2 郷土料理の場所は利用者と職員どちらが決定するのですか?
- A2 利用者にも案をもらいながら、栄養課で決めています。
- Q3 ペースト食の方にはどのように提供しているのですか?
- A3 ペースト食の方にも同じものを作っています。



主体的でいきいきした生活の維持を目指して ~特別養護老人ホームだからできる経管栄養利用者のケア~

世田谷区立特別養護老人ホーム上北沢ホーム サービス係 磯野かおり、藤原ふさ子

1 はじめに 私たちの課題意識

口から必要な栄養を摂れなくなったときの方法の一つに、胃ろう等の経管栄養法がある。経管栄養になったら、ベッドから離れられないのではないか、大好物はもう食べられないのか等、今まで普通に生活していたことを諦めなくてはと思われがちである。

諦める生活ではなく、いかに主体的にいきいきと暮らしていただくことができるか、 上北沢ホームで取り組んでいる個別ケアについて、事例を交えて実践報告をする。

- 2 ご利用者のニーズを通してみえた支援の3本柱
- (1) 起きて過ごす ~ (例) 外出やレクリエーションへの参加
- (2) **味覚を楽しんでいただく** ~ (例) 好きな味を見つける
- (3) 馴染みの生活スタイルの継続 ~トイレでの排泄、食堂でのおしゃべり
- 3 支援のプロセス

アセスメント(多職種による情報集約・分析)

- ⇒医師の判断 家族への説明・同意
- ⇒多職種合議によりケアプラン案作成
- ⇒本人、家族の同意
- ⇒サービス実施
- ⇒モニタリング(評価)
- 4 事例から
- (1) 外出、レクリエーションへの参加
- (2) 好きな味を楽しむ
- (3) トイレの使用
- 5 おわりに 今後の取組みと展望について

- Q1 気持はあっても、なかなか経管栄養者の離床をケアの基本とするのは難しい。日中帯の職員体制を厚くするなど特別な体制をとっているのですか?
- A1 特別な体制は全くありません。移乗を二人対応で行うなどしているが、それ も、通常の介護の流れの中で普通のこととしてやっています。
- Q2 味を楽しむとかドライブとか、そもそもどのような発想からこのようなケア が定着するまでになったのでしょうか?
- A2 長年行ってきたその人にとっての普通の生活を、ホームの暮らしの中でも 普通に継続していただきたいという思いからです。その意味で、口から食べ ている人も経管栄養利用の方も私たちのケアの姿勢に区別はありません。



題名 いつも笑顔で~安全・安心を守りたい~ テーマ 利用者に直接関わるアクシデント(介護事故)への取り組み

砧ホーム 陸田 光昭 三浦 好顕

活動の目的

アクシデントを防止し、利用者と職員がともに「笑顔あふれる安全な暮らし」を目指します。

実践内容

背景として、介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)では、介護事故を含む様々なアクシデントが起こりやすい環境にあります。アクシデントが起こると利用者やその家族はもちろんのこと、関わった職員にも大きな痛みが伴います。日常的に起こるアクシデントを効率的に処理し、効果的な再発防止策を行っていくことが大きな課題でした。

私達は、「自施設におけるアクシデントとは何か」を考え、職員が共通の理解をもてるように判定基準を整理しました。また、どんな予防・再発防止策を考えるべきか、情報共有・職員教育・ケアマネジメント・システム改善などの視点から理解を深めていきました。さらに、対策の確実な実施や適性な処理ができるように対策を立てて終わりではなく、その対策を監視できるようにしました。このように、施設独自の処理システムを構築し、実践しました。

結果

アクシデント処理の遅れや職員による対応のバラツキが改善され、予防・再発防止 策が曖昧になることが改善されるなど施設の機能性が向上しました。さらに、繰り返 される事故が減少するなどの成果を得ました。

考察

本編では割愛していますが、取り組み前後でデータを収集し比較しています。結果、アクシデントの総数に大きな変化はありませんでした。考えてみると、ヒヤリハットは単純に数の増減では比較できないことに気がつきました。「危ない」がたくさん抽出できると、むしろ事故を未然に防ぐことに繋がるからです。しかし、予期されなかった突発事故件数には大きな変化がなく、本当の成果を得られていないのかも知れません。

ともあれ、試行錯誤の結果、今手応えを感じつつあるのは確かです。「現段階でのまとめ」を発表させていただきたいと思います。ぜひ多くの方々に視聴いただき、高齢者施設でのアクシデントとどのように向き合っていくか、皆様と一緒に考え、意見交換ができる有意義な20分になると幸いです。

- <質疑応答>

- Q1 行う前と後のアクシデントの数はどうなりましたか?
- A1 ヒヤリハットを含む総数では大差がなかったが、単純な数では計れません。 ただし内訳では、繰り返されるアクシデントが減少しました。
- Q2 再発するアクシデントの数が減ったのはなぜですか?
- A 2 再発防止策の実施を監視し、見直しを行うという仕組みにしたのが効果的で した。
- Q3 理解の困難な方へどの様な対策をどのように行っているのですか?
- A3 個別の対策は、ご本人の心身状況に合わせて行っています。例えば、職員間で情報を共有する等があります。



高齢者に対するレクリエーションの効果の検証

発表者所属;介護老人保健施設・ホスピア玉川;原初枝;須田美恵子;櫻田和子;七邊玲央奈

共同研究者;臨床美術士;市丸洋子;小川朋子;平野万里子;田宮晶子;

音楽セラピスト;小川聖子;河野順

要旨

昨年度「介護老人保健施設におけるレクリエーションの意義と役割」の研究結果から、レクリエーションの意義と役割を少しではあるが解明できた。老健でのレクリエーションの意義として、単なる余暇の楽しみのような消極的なものではなく、治療の手段のような積極的な意味があり、また役割として、食事、排泄、入浴の三大介護、リハビリに加えてレクリエーションにもポジティブな役割分担があると結論付けられた。今後、レクリエーションは、このリハビリを補完する退行予防に力点をおいて、実践することの重要性を認識した。そしてこの役割を実践するためには、レクリエーションの種類別に、個人の状況を細かく捉える必要性を感じた。そこで、今年度開始したアート教室について、メンバーを10人前後と限定し、毎回参加していただき、継続して利用者の状況を臨床美術士とともに観察し、臨床美術士が作成する個人カルテと、フェイススケールの整合性を確認した。

そして「朗読の会」については、開催したフロアーを対象として、4月から、毎月 一度開催し、利用者一人ずつ朗読をしていただき、朗読のレクリエーションとしての 効果として、利用者自身の周辺症状にどのような変化を与えるかを、検証する研究を 行った。

実践内容

アート教室開催・・・7回

臨床美術士のカリキュラム実施 フェイスケール・利用者カルテ作成 本人、各担当介護士、職員に聞きとり・ADL評価

② 朗読の会開催・・・5回

音楽セラピーによる、紙芝居朗読と合唱 フェイススケール・ビデオによる比較 本人、各担当介護士、職員に聞き取り

結果と考察

- ① アート教室;フェイススケールの結果から、毎回アート教室の前と後では、気分が良くなっていることが表れた。利用者が毎回楽しみにしているようすが聞き取りからわかり、フェイススケールの結果を裏付けていた。会を重ねるごとに、効果が顕著になる傾向があった。
- ② 朗読の会;フェイススケールにより、参加した利用者は、平均すると気分が良くなっていることがわかった。参加した利用者と参加しない利用者とのフェイススケールを比較し、レクリエーションの実施方法には、その場の状況が重要であることがわかった。

課題

- ① 利用者の周辺状況の変化をとらえるための方法の確立が重要である。
- ② レクリエーションの実施方法・状況の設定を検討する。

- Q1 臨床美術士とはどのような資格ですか?
- A1 臨床美術学会が認定した資格です。現在は11名います。
- Q2 レクリエーションを受けている人は認知症の方も含まれますか?
- A 2 アートの会の参加条件を付けなかったため、認知度の高い方もいらっしゃいました。
- Q3 アートの会では具体的に何を行っているのですか?
- A3 オイルパステル他、木炭で描く画です。



高齢者介護施設における園芸療法の実践

日本園芸療法普及協会 吉永美和

活動の目的: 園芸を手段としてクライアントの心身の機能向上をはかる。

実践内容: 高齢者介護施設にて週1回約1時間クライアントの ADL に合わせ園芸活動を行う。

詳しい内容は以下通り。

ある施設での実践 (チューリップの球根を植える)

• 目的

春になると花が咲く球根を自らの手で植え土の感触を感じながら、春を楽しみに待つ気持ち、育てる楽しみを持つ。

手順

- 1 プランターに鉢底石を入れる。
- 2 培養土3:パーライト1の割合で土を混ぜる。
- 3 プランターに半分まで土を入れる。
- 4 好みの球根を選び花の咲いた時を想像して球根を配置する。
- 5 土をプランターの8分目まで入れる。
- 6 ラベルに日付、名前、チューリップと書き挿す。
- 7 水をやる。

・効果と結果

- 土を混ぜる、水をやるなど手を動かすことにより運動機能の向上を図る。
- 好みの球根を選ぶことで、「選択する」という判断力を養う。
- チューリップという馴染み深い花を用いることで、回想をし、昔を懐かしむ。
- ・ 土、石、球根、水などにふれることで五感が刺激され、ストレスが解消 される。
- 協同作業を行うことによって、コミュニケーションがとれる。
- ・ 春を待つという目的があることにより、生きがいが見出せる。
- ・ 花が咲くまでの水やり等の作業をすることにより、生活にリズムが生まれ、責任感が養われる。

課題: 選芸療法は実に様々な効果が期待できます。

アメリカやイギリスでは立派な職業として成り立っていますが、日本では認識が浅く、実践場所が少ないのが現状です。

実践場所が増えることも重要ですが、今後高齢化社会において、介護予防の見地からも園芸療法の実践の場が広がっていけばと考えています。例えば、自宅の庭を高齢の方でも「思わず外に出て花や野菜の手入れをしてみたくなる」ように作り、日々の生活のなかで、自然と心身の機能向上が図れ、緑によってストレスが軽減されるようにしたいと考えています。

また高齢者のみならず、ストレスを抱えた方、何らかの障害を持った方、 幼児、学生を対象として活動の場が広げていけたらと考えています。

- <質疑応答>

- Q1 園芸療法士はどのようなところで活動を行っているのですか?
- A1 特養などに定期的に伺い、職員の方とボランティアの方と共有して活動しています。
- Q2 施設で花を植えるのと園芸療法の違いはなんですか?
- A2 園芸療法の対象は利用者で、花を植えるという行為の対象は花です。
- Q3 園芸療法士の資格について教えてください。
- A3 園芸療法士も民間の資格です。



老人のためのぬり絵作り ―デイサービスでの実践報告―

デイホーム桜丘:井上 美加

デイサービスでは様々なアクティビティを用意している。

その中でもぬり絵という活動に着目し、利用者が塗りたくなるぬり絵とはどういうものかを7年間かけて研究し、そこで得た成果について報告する。

当初、ボランティアの学生が描いた絵を利用者に塗ってもらい、毎月カレンダー(以下ぬり絵カレンダー)にして利用者が持ち帰るという活動を行っていた。しかし学生の描く絵が花の絵や風景など付け焼刃的な静物画が多かったため、利用者の反応も悪くあまり塗ろうとしなかった。そのためスタッフも積極的な介入ができず、ぬり絵カレンダーという活動があまり発展していなかった。そこで絵の改善を図るため、プロの漫画家を探しぬり絵カレンダーを描いてもらうよう依頼した。

作家には絵の内容に盛り込んで欲しい事として、老若男女が楽しめる事、季節感がある事、線をつなげて描く事を伝え、心がけてもらった。作家が仕上げた絵はストーリー性があり動きのあるもので、手に取ったときにクスッと笑いの出るような作品だった。そのため、まず利用者よりもスタッフが「面白い」とか「変わっている」などの反応を示し、利用者に積極的に働きかけるようになった。スタッフの働きかけがあると、それまでぬり絵カレンダーに消極的だった利用者も、1人2人と取り組むようになった。更に、より多くの利用者にぬり絵カレンダーという活動に参加してもらうために、その後様々な工夫を加えていった。

その結果、7割近くの人が現在はぬり絵カレンダーを塗るようになった。また、1人ではうまくぬり絵が塗れないがスタッフに塗ってもらい作品を持ち帰りたい、と要求する利用者も現れるようになった。それ以外にも当初から期待していた、利用者の家族からの反響「おばあちゃんの持って帰るぬり絵は面白いね」なども得られるようになった。ぬり絵カレンダーを介して、利用者・家族・スタッフのコミュニケーションが生まれるようになった。今ではこのぬり絵はわれわれのデイサービスの中で、重要なアクティビティの1つに成長している。発表では具体的に塗りたくなるぬり絵カレンダー作りについて詳細を述べる。

- <質疑応答>

- Q1 1枚塗るのにどれくらいの時間がかかりますか?
- A1 カレンダーなので来月に間に合うように塗ります。早さには個人差がありますが、速い人で3時間くらいです。1日のデイ利用で完成する人もいます。
- Q2 出来上がった作品をみんなで見せあわないのですか?
- A 2 塗った作品をいち早く利用者が持って帰りたがるので、特に見せあったりはしません。
- Q3 プロの方に原画を頼んでいるが、どのような繋がりがあって頼めたのですか?
- A3 知り合いがもともといたので頼みやすかったです。
- Q4 途中で投げ出してしまった方や認知度の高い方への対応はどうしていますか?
- A4 スタッフが働きかけをして、少しずつ塗ってもらったり、ボランティアの方が話しをしながら一緒に塗ったり、カレンダーは塗れないが欲しいという人には塗ってあげています。



健口体操に呼吸リハビリを取り入れたその効果について

発表者 世田谷区社会福祉事業団芦花ホーム 介護職員 那須康樹,市川龍太郎,星希美 共同研究者 世田谷区社会福祉事業団芦花ホーム 看護師 田中君子 歯科衛生士 渡辺三恵子

【はじめに】

高齢者、特に特別養護老人ホーム入居者にとって肺活量の低下は、身体機能の低下に直結するもので、廃用症候群や高齢者呼吸機能障害を生じる大きな要因の一つとなっている。体調を崩した際、気管支炎や肺炎など重篤化に陥りやすく生命の危機にまで及ぶこともある。肺機能、肺活量の維持向上が認められれば、体調の安定が図れるとともに、活動範囲が広まり、生活機能を高めることができる。また、咳やクシャミの勢いが高まり、食事の際正しく嚥下が出来なかった場合でも、異物や痰を体外に強くはき出すことができるため、誤嚥、窒息の予防にもなる。

芦花ホームでは、入居者の口腔機能の維持向上をめざし、平成 20 年 9 月より入居者を対象に健口体操を実施し、その効果について検証を行ってきた。その結果、オーラルディアドコキネシスと反復唾液嚥下テストでは効果が見られたが、発声の持続時間では目立った効果は得られなかった。そこで、医学的有用性が認められている「呼吸リハビリ」を健口体操に取り入れることにより肺機能、肺活量の維持向上へのアプローチになるのではと考え、平成 22 年 2 月より他職種と連携して取り組みを開始した。その結果、興味ある知見が得られたので報告する。

【対象と方法】

呼吸リハビリは、入居者 20 名に対し一日一回昼食の前または後に行っている。そのうち10名を平成22年2月から7月の6か月間発生の持続時間を調査した。対象者の平均介護度は3.6、平均年齢は88.7歳であった。呼吸リハビリ実施時の効果をより明確にする為、上記対象者8名を含む、入居者10名に対し平成22年8月から10月の3か月間、呼吸リハビリ実施前と後に発声の持続時間とブローイングを調査した。対象者の平均介護度は3.6、平均年齢は88.4歳であった。

【結果】

発声の持続時間で全体の平均数値は、平成22年2月5.65秒から同年7月の評価で、8.1秒と数値の増加が確認された。調査期間中2名の方が体調不良により途中より評価ができなかった。その他8名の方はADLの低下は認められなかった。平成22年8月呼吸リハビリ実施前後の評価では、発声の持続時間で全体の平均数値は、運動前5.7秒から運動後8.2秒と数値が増加し、ブローイングで全体の平均数値では、運動前5.0秒から運動後8.0秒と数値の増加が確認された。

【まとめ】

呼吸リハビリは、一日一回の実施で肺機能、肺活量への効果があることが判明した。 呼吸リハビリの実施により入居者の体調の安定が図れ、離床時間の確保、外出機会が 増えるなど、生きがい支援へと繋がった。今後も世田谷区歯科医師会と連携しながら、 施設における日常サービスとして健口体操とともに呼吸リハビリを継続し、介護保険 施設入居者の Q.O.L.向上に繋がる新たな指標を示していきたいと考えている。

- Q1 口腔ケアはいつ行うのですか?
- A1 毎食前と毎食後に行っています。食前は、覚醒が悪い・汚れがひどい方など を中心に実施しています。食後は、食物残渣除去を中心に利用者全員に口腔 ケアを実施しています。
- Q2 健口体操や呼吸リハビリは、いつ行っていますか?
- A2 各フロアのその日の状況によって異なります。紹介しているフロアでは、昼食やおやつの前を利用して行っています。おおよそ午後1時~2時の間の、20~60分間の体操を実施しています。
- Q3 タオルを使用した体操はどのように考えたのですか?
- A3 歯科衛生士、看護師、介護職員とで話し合って、職員なら誰でも利用者に説明がしやすくわかりやすい内容であること、利用者が負担とならないようにと考えました。
- Q4 個別機能訓練とこの体操はリンクしていますか?
- A4 現在はリンクしていません。
- Q5 体操にかかる時間はどれくらいですか?
- A 5 利用者の方々の疲れや体調によってプログラムや時間を調整しています。短くて15分程度~長くて1時間位行っています。



第2分科会総括

特別養護老人ホームさつき荘施設長 橋本 睦子

第2分科会は「施設での生活の充実」、司会進行は福祉ジャーナリストの村田幸子さんと 特養ホームさつき荘の橋本でした。

「施設での生活」がテーマですので、老人保健施設、特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、そして施設でのレクリエーションとして園芸療法普及会の皆さんの7題の発表がありました。

参加者も施設職員の方が多かったようで、質疑も活発でした。明日にでも活かせそうな内容や先進的な取り組みが発表され、本当に学びの場になったと思います。

また、個別ケアということが求められておりますが、「施設でそこまでできるの?経管栄養をやっている方への個別ケアがそこまでできるの?それは人数を多く配置しているのではないの?」という質問が出るくらい本当に個別対応の充実がはっきりと打ち出されたような報告が多く世田谷区の施設ケアの充実を実感いたしました。

発表の仕方については、参加された区民の方のご意見にもあり、村田先生からもお話しがありましたが、パワーポイントの字が細か過ぎてどこまでわかってもらえたかとか、あるいは、早口過ぎたんじゃないのとか、何をどう伝えるかということについてはまだ工夫が必要かなというご意見がありました。

全体としては、せたがや福祉区民学会準備大会の時に比較しますと非常に充実した、世田 谷区の取り組み自体が本当に変わってきたなということが肌で感じられるような内容では なかったかと思います。

他にも先進的な取り組みの発表も多々ありましたが、学会が、より発展していく事で学生の皆さんの福祉の仕事をやろう、世田谷の事業所で働こうかなと、そんな意欲も引きだせるのではないかと期待しております。それも学会の目的の一つでもあります。よい勉強の場になりました。ありがとうございました。



第3分科会 認知症ケア/介護と医療の連携

進行役・助言者 : 瓜生律子(世田谷区障害者地域生活課長)

和気康太 (明治学院大学社会学部社会福祉学科教授)

	発表者	所属	テーマ
1	河合 靖子	福) こうれいきょうデイホーム三宿	認知症対応型デイサービスの新たな取り組みと今後の 課題 「夕食を食べてから、帰ろう!」
2	白石 晶紀 藤倉 義之 永嶋 千秋 橋本 浩	世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム芦花ホーム	入所施設での、認知症高齢者の方への新たなアセスメントシートの工夫 ~職員の気づきの大切さ~
3	市川 裕太	グループホームかたらい	認知症になっても住み慣れた場で安心して暮らし続けるために 〜医療と介護の連携による重度の認知症の人への誤嚥 防止の取り組みとこれからの嚥下機能維持に向けた認 知症支援のあり方を考える〜
4	笠原 康右	世田谷区社会福祉事業団デイ・ホーム太子堂	若年認知症者への通所介護サービスとは ~求められる役割について~
5	鈴木 環	駒澤大学社会福祉学専攻	小児がんの疾患特性に基づく MSW 介入の在り方に関する考察
6	石井 ひろみ	ほっとケア	心を近づける介護と医療行為の実際 「訪問介護に役立てる ALS の理解と援助の方法」の研修 報告
7	片岸 美佳	世田谷区社会福祉事業団 訪問看護 ステーションさぎそう	訪問看護ステーションとグループホームが協働して行った看取りへの取組み

認知症対応型デイサービスの新たな取り組みと今後の課題 「夕食を食べてから、帰ろう!」

発表者:デイホーム三宿;河合靖子

共同研究者:デイホーム三宿;和泉拓

新たなユニット増設の目的

「夕暮れ症候群」と一般的に言われている認知症の症状が有ります。夕方近くなり、 太陽が徐々に沈みかけてくる頃に、気分的にそわそわと落ち着かなくなり、外に出て いこうとする姿が多く見られる。そんな状況では介護するご家族も負担が増えると考 え、夕方に自宅に帰るのではなく、夕食を召し上がってもらって、落ち着いた状態で 自宅にお送りするということを目的に増設した。

時間帯をずらしたデイサービスの特長

- ① 朝のお迎え時間が早くない → 10:30~11:30 の間に自宅までお迎えに上がる (一般的なデイサービスは8:30~10:30 頃)
- ② 夕方の送り時間が早くない → 18:20~19:15 の間に自宅までお送りする (一般的なデイサービスは 15:00~17:00 頃)
- ③ 昼食はもちろん、夕食の提供を行う → 食事に関する様々な負担の軽減につな がっている

3カ月経過しての結果

- ・利用者は徐々に増えつつある。時間帯を通常よりもずらしたことで、ニーズと合致した家族や利用者さんも多くいらっしゃった。
- ・特に朝の送迎時間が遅くなったことで、ゆっくりと起きて準備をすることができるといった感想が利用者さんのご家族から出ている。また、送りの時間帯も遅くなることで、家事や習い事など、介護者の時間を作ることが可能になった。
- ・夕食の提供についても、認知症の進行や身体的な低下により、介助が必要になった利用者さんに対して、食事の介助を行うことで、介護するご家族の負担軽減につながっている。

今後の課題

・認知症を患っている高齢者を自宅で介護することは、介護するご家族にとって様々な問題が出てくる。デイサービスの時間帯を変えることや夕食の提供を行うことももちろんだが、個別のニーズを洗い出して、その悩みに応えて実践していくことが今後はもっと必要になると考えている。

- Q1 運動面の取り組みはどうなっていますか?
- A 1 午前中は送迎の時間が遅い (10 時 30 分から 11 時 30 分) ので、午後から散 歩等を行います。
- Q2 利用者は何名いますか?
- A2 全部で34名です。2階(夕食ありユニット)は6名です。



入所施設での、認知症高齢者の方への新たなアセスメントシートの工夫 ~職員の気づきの大切さ~

発表者:特別養護老人ホーム 芦花ホーム 白石 晶紀、藤倉 義之 永嶋 千秋、橋本 浩

共同研究者:特別養護老人ホーム 芦花ホーム 認知症研究チーム

<研究目的>

介護保険がスタートして、施設へ入所される利用者の 8 割の方が、認知症となっている。認知症の方の介護においては、その方の生活歴や時代背景などが重要な情報となるが、自施設で今まで使用していた三団体式のシートでは、身体的な特徴が中心のアセスメントとなり、介護計画が、事故予防・身体的なニーズ中心のもので、個別的な物にならない現状があった。この課題を改善するため、認知症介護で重要な、生活歴や時代背景などに、より焦点を当てられるアセスメントが行える体制を構築し、認知症の方でも施設で自分らしく生活していただけるよう、認知症に関するケアを、一から見直していき、改善に取り組むと同時に、より良い対応などを様々なケースを通じて、研究を行っていく事を目的とした。今回発表する内容は、研究事業の初期段階であるアセスメントを中心としている。

<実践内容>

- 1. 認知症介護にかかる知識、及び対応方法の考え方
- 2. 新たなアセスメントシート(試行用)の作成
- 3. 2を用いた職員個々によるアセスメント
- 4. 職員ディスカッション
- 5. アンケート調査

<結果>

- ・現在のアセスメントシートと新たなアセスメントシートの違い
- ・ディスカッションやアンケート調査を通じての、職員の気づき

<考察として>

- ・利用者のアセスメントは、職員個々により違いがあり、その違いを一つにすることで、より利用者のニーズを把握できるのではないか?
- ・アセスメントシートの種類よって、職員のアセスメント方法が、大きく変わって くるのではないか?

<課題として>

- 新たなアセスメントシートによる、チームによるアセスメントの実施
- 新たなアセスメントシートからのニーズの把握
- ・ニーズの分析からプランに落とし込む際の課題の抽出

- <質疑応答>

- Q1 職員が家族に対してヒアリングしやすい環境を整えることの具体的な取り 組みはどんなことですか?
- A1 これから改善していく所なので、今後の取り組みです。入所後にゆっくり時間をとっていこうと考えています。
- Q2 水分摂取の把握はどうしていますか?
- A2 栄養マネジメント等で水分についても管理しています。ライフチャートで食事量の確認とあわせて水分量も確認しています。
- Q3 状態変化については24時間のシートを活用しているのですか?
- A3 24 Hシートを活用しています。よりよいシートにしようと、試行錯誤しているところです。



認知症になっても住み慣れた場で安心して暮らし続けるために ~医療と介護の連携による重度の認知症の人への誤嚥防止の取り組みと これからの嚥下機能維持に向けた認知症支援のあり方を考える~

グループホームかたらい ホーム長 市川 裕太

1. はじめに

平成 16 年に開設した定員 18 名のグループホーム。6 年経つと認知症の進行により生活の継続が難しくなる方が多く、他施設等への移動による退去者が 16 名になっている。

- 2. 「グループホームかたらい」におけるこれまでの退去理由とその原因 平成 16 年 9 月~平成 22 年 10 月までの期間で退去した人の多くは療養型 施設への入所である。さらに原因を見ると、嚥下機能低下による誤嚥性肺 炎での入院から退去につながるケースが主となっている(16 名中 10 名)。
- 3. 歯科医師との連携による嚥下機能低下における支援 平成22年8月、内視鏡で嚥下状態を検査しその後の嚥下機能の維持及び 回復を研究している歯科医師と出会い、当ホームでの嚥下機能回復に向け、 ご家族の協力の下、嚥下機能が低下している方に対しての検査とその後の 支援についての取り組みが始まった。

4. 実践内容、考察(Aさんの事例)

ペースト、全介助のAさんは飲み込みに時間がかかり、食事中やその前後にむせ込むことが多くなってきた。そこでまず食事状況を見直すため、現在の食事や飲み物を服用し、飲み込みの状態を内視鏡で確認し、その後飲み込みの状態に応じ、トロミの量の加減やペース、食事量の調整を行い、実際に飲み込みの状態を確認しながらAさんに見合ったものを検討した。約2か月で食事時間や摂取状況が改善し、現在はAさんの生活に合わせて必要な食事がバランス良く提供できるようになった。このことは、Aさんの健康状態の保持だけでなくAさんに対する職員の介護負担の軽減、往診時の全職員参加とその後の会議等での周知徹底による質の向上、その他家族にとっても飲み込みによるむせ込みが起こることへの不安が減少し、安心感につなげることもできた。

5. まとめ

これからのグループホームのあり方として嚥下機能維持に向けた取り組みは誤嚥性肺炎を防ぐことにつながり、その結果できる限り住み慣れた場で安心して暮らし続ける期間が長くなることが期待できる。身体状況の変化とともに医療との連携は欠くことができず、いかにして様々な専門医と連携を図ることができるかは、入居者、家族、職員にとって大きな課題である。

- <質疑応答>

- Q1 普段、口腔体操や嚥下体操は行っていますか?
- A1 体操とは言わず、歌やマッサージを行っています。自然な形で取り組めるようにしています。
- Q2 認知症の方に内視鏡を入れるのは大変ではないですか?評価はどのように行っていますか?
- A 2 内視鏡は痛みはないが、怖がるので手を繋ぐ等スタッフがそばにいるようにしています。評価は医師に診てもらいます。それからスタッフができることを話し合います。



若年認知症者への通所介護サービスとは ~求められる役割について~

社福)世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム太子堂所長 笠原康右

1. 若年認知症コース開設の経緯

若年期認知症と初老期認知症の両者を含み、発症年齢が 65 歳未満の認知症疾患 の総称が若年認知症である。

若年認知症は、個別的な症状に合わせた対応や施設内に限らず地域に出て活動し 社会とのつながりを保つことで、不安や興奮といった症状の軽減、身体機能の維持、 精神面の安定を図る事が出来る。そのために、スポーツや散歩、買い物など行動的 なプログラムが求められており、高齢者を対象とした認知症対応型通所介護や一般 型通所介護では対応しきれない現状がある。

東京都でも若年認知症に対する取り組みが進む中、世田谷区社会福祉事業団では、 平成22年4月からデイ・ホーム太子堂で毎週土曜日に、若年認知症コースを世田 谷区内で初めて開設した。

平成22年4月から11月までの取り組みについて報告する。

2. 若年認知症コースを行う目的

- ①若年認知症者がその人らしさを失うことなく安心して過ごせる場を提供することで、一人ひとりがその状態に応じた適切な支援を受けられる。
- ②継続的に家族を支援するため、家族会の開催や情報の発信を行う。
- ③社会の理解を得るために、地域へ啓発活動を行う。

3. 若年認知症コースの取り組み

目的達成ためサービス内容は、以下を基本としている。

- ①利用者のニーズに応じた、個別的なプログラムの提供
- ②朝の会で利用者と職員が話し合いながら、その日のプログラムを決定
- ③写真や文字等でプログラムを記録する振り返りを毎回実施
- ④医師との連携
- ⑤家族支援

4. 今後の課題

- ①本人の症状や心身状況の変化に合わせたプログラムの提供
- ②個別の作業等に伴う評価表の作成・記録
- ③家族会の立ち上げ
- ④若年認知症デイサービスの周知

- Q1 相談員の体制はどのようになっていますか?
- A1 通所介護(一般の通所介護)の中で、土曜日を若年認知症専門コースとして 受け入れているため、1名です。
- Q2 実際の送迎範囲はどこまでですか?
- A2 一番遠いところで北鳥山です。片道30分程度かかります。
- Q3 世田谷区に若年認知症の方は90人推計されていますが、太子堂の利用者は 4名ということですね。他の方はどうされていると思いますか?
- A3 ご自宅で過ごされていると推定されますが、明確にはわかっていません。必要な方に必要なサービスが届くようにしていきたいと思っています。
- Q4 地域にはどうアプローチをしているのですか?
- A 4 本人やご家族から周りに公表しないで欲しいと言われているため、今は地域にはアプローチをしていません。



小児がんの疾患特性に基づく MSW 介入の在り方に関する考察

駒澤大学社会福祉学専攻 4 年 鈴木 環

〈はじめに〉

医療技術の進歩により約7割が生存できるようになった小児がんではあるが、昨今、その多様な病態と予後に応じた心理・社会的支援の貧しさが指摘されている。ここでは、主に学童期の小児がん患児の生活基盤を支える存在として、医療ソーシャルワーカー(以下、MSW)に着目し、その介入の在り方を考察した。

〈小児がんの疾患特性〉

- 疾患及び病態と予後が多様
- ・長期入院による、家族や友人からの分離不安や学習空白・対人関係への苦手意識
- ・各種治療による種々の副作用・晩期障害
- ・感染予防など日常生活における制約
- 〈小児がん患児に対する MSW 介入の特徴〉
- a. 受診·受療
- b. 入院治療開始
- c. 特別支援学級及び地元校との連携※
- d. インフォームド・コンセント
- e. 経済的支援
- f. 家族(保護者・きょうだい児)支援※
- g. 退院支援
- h. 復学支援※
- i. ターミナル・ケア

※学童期の小児がん患児に対する特徴的な支援

〈現状と課題〉

医療機関によって、マンパワーや設備に差が見られる。特に、院内学級・訪問学級の有無は患児のQOLに多大な影響を及ぼすと考えられる。MSWの配置数や機能にもばらつきがあり、「疾患特性に留意した介入」の実践は難しい状況であることが多い。また、晩期障害へのアプローチを含めた治療後の支援が不足しており、小児がん経験者の復学や社会復帰には様々な困難が伴う。ターミナル期にある患児への心理・社会的支援も不十分であり、小児のターミナル・ケアにおけるMSWの役割も要検討である。〈考察〉

ICF モデルから小児がん患児を捉えた際、疾患特性の要因となり得る環境因子に対して、MSW はその機能をもって対応・解決することが可能ではないだろうか。そのため、まず MSW の存在と機能を広く適切に認知されるよう啓発してゆくことが不可欠であり、MSW 自身も小児がん医療に関する知識を学ぶことが求められる。これには個々人の努力のみならず、各医療機関や行政への働きかけも重要となるだろう。

学童期の小児がん患児は、長期入院中も、病院という環境の中で成長し様々なことを学んでゆく。治療を終えることが可能なケースが増加していることを考慮すれば、患児にとって病院は単に治療を行う機関で完結する場所ではないと言える。したがって、病院を生活・成長発達の場として捉え、それを整備する役割としてMSW は非常に大きな存在となり得る。その役割を、MSW 自身はもとより、他の医療スタッフをはじめとする医療機関全体、そして患児やその家族に認識してもらうことが重要と言えるだろう。

- <質疑応答>

- Q1 入院している子どもの教育支援はありますか?
- A1 院内学級の有無で差があります。ない場合は特別支援学校、学生ボランティア等が対応しています。
- Q2 経済面はどうなっているのですか?
- A 2 小児慢性特定疾患に認定されているので軽減されます。ただし20歳以降への支援は手薄いです。
- Q3 MSWの認知度を高めるにはどんな考えを持っていますか?
- A3 がん患者の会と各病院MSWとのネットワークづくりです。
- Q4 医師、看護師には小児がん専門がいるが、MSWは単なるMSWで対応できるのですか?
- A4 より高い専門性のMSWを育成していくべきではないかと思います。



心を近づける介護と医療の実際

「訪問介護に役立てるALSの理解と援助の方法」の研修報告

ほっとケア 石井ひろみ

「普通の老人の介護とALSの介護は違う」ALSの家族を見送った家族からの言葉。その言葉をうけて茨城から始まった小さなセミナーを世田谷でも行ってみました。

ALSの方の介護は比較的若い人を、進行する病気の特性をかんがえながら、長時間、長期間行わなければなりません。人によって症状のでかたも様々です。コミュニケーション手段、食事のとり方、ADLの低下に対しヘルパーさんの戸惑いも多く、やがて、吸引・胃ろうと医療的な処置にも出会います。そうした戸惑いのなかで、「よくわからない」「苦手」など疾患のことがわからないからこそ起こる誤解や精神的な負担が見え隠れします。

私は看護師であり、ケアマネジャーです。自分が働き暮らすこの地域で医療があっても安心して暮らせる地域を目指し、出来ることを考えながら活動をしてきました。 今回は、在宅看護研究センターLLPの「看護と介護の連動」という活動理念のもと、所属看護師の協力を得て、研修をおこないました。その報告をします。

研修の実際

参加者 ヘルパー15名 ケアマネジャー2名

内容 ALS理解のための講義

体験 「文字盤 胃ろうの注入 吸引の実際」

ALSはどんな病気なのか?本人や家族はどんな思いなのか?実際に行われている医療はどんなことなのか?知ることで心を近づけていけるのではないか、そのような視点から研修を構成してみました。参加者からは、今後積極的に介護にかかわってみたいなどの声も聞かれました。研修は体験型のこともあり、雰囲気はにぎやかなものとなりました。各体験の説明は実際に看護にあたっている看護師が行いました。そのため、普段看護師には聞けないことをきいたり、看護師がどのような思いで看護に当たっているかの交流の場にもなりました。

今後の課題

アンケートからも見えてくるように、このような体験型の研修の機会が少なく、望まれていることがわかりました。さらに内容を吟味し、よりわかり易く、参加しやすいものを考えていきたいと思います。

- Q1 今後の研修の予定は決まっていますか?
- A1 まだ決まっていません。
- Q2 ALSとはなんですか?
- A2 難病です。
- Q3 排せつなどの介助は可能ですか?
- A3 その人の状態によるが、可能です。段階によります。



訪問看護ステーションとグループホームが協働して行った 看取りへの取り組み

発表者 社会福祉事業団 訪問看護ステーションさぎそう 片岸 美佳 共同研究者 松井 知子・斎藤 ゆり・水野 真由美・大塚 恵美子 佐々木 則子・深沢 光子・村中 博子

訪問看護ステーションさぎそうでは平成 18 年から施行された医療連携体制加算により、グループホーム「やまぼうし」への訪問を開始した。「やまぼうし」は開所して5年目となり、経過とともに入居者も認知症の進行、基礎疾患の悪化、新たな内臓疾患の発症により身体状態が衰え、看取りをどう支えるかという課題を抱えるようになった。その中で、職員が看取りに対して不安を持っている事がわかった。そこで連携する訪問看護ステーションとして、やまぼうし職員と協働し、入居者の看取りができるようになるためにはどうしたらよいか取り組んだ。その結果について報告する。研修目的:入居者が安心して最期まで住み慣れたホームで過ごせ、職員も安心して入居者の看取りをする事ができる。看取りの研修等をする事で、職員が主体的に看取りについて取り組める。

研究方法

- 1. 研修前アンケートの実施 (やまぼうしの職員への記述式アンケート)
- 2. 研修計画
 - ① 職員アンケートの分析
 - ② すでに看取りを行っているグループホームの視察とインタビュー、看取りを行っているグループホームと連携する訪問看護ステーションへのインタビュー
 - ③ 看護師の文献学習 研修参加
 - ④ ①②③を踏まえ、やまぼうしでの研修内容を検討する
- 3. 研修の実施
 - ① やまぼうしの職員会議に参加し、職員の意識づけを明確にする
 - ② 職員会議の時間内(1時間程度)で、一般的な看取りの経過について研修を行う
- 4. 研修終了後に、アンケートを実施
- 5. 研修前後のアンケートの分析と考察

当初看取りのイメージがつかず漠然とした不安が大きかった職員が、1年間の関わりを通じ、看取りのイメージを持つ事ができ、看取りができると思うようになった事、看取りだけでなくケア方法なども学ぶ意欲が出た事がわかった。さぎそうでは、今後も連携を十分にとり、入居者が安心して最期まで過ごすことが出来る事、職員が死生観を育み充実した看取りが出来る事を目標に関わってゆきたい。

- <質疑応答>

- Q1 さぎそうでは、看取りの経験はありますか?
- A1 利用者宅では経験があります。やまぼうしで死亡された3名の方は、いずれも入院先の病院で亡くなっていますので、施設での看取りの経験はありません。
- Q2 他の利用者に対する配慮は?
- A 2 入院での死亡でも利用者には若干の変化がみられました。看取りの取り組み中で今後考えていきたい課題です。家族とも話し合って行きたいです。
- Q3 家族とは相談をしていくのか?
- A3 看取る場所はどこか、急変時は救急車を呼ぶか、施設の業務の中で職員の巡回時に発見される場合もあるなど、ひとつずつ決めてゆく予定です。実際の話し合いは、まだ持っていない状況です。
- Q4 訴えられたらどうするのですか?
- A 4 その為にも、話し合いを持ち細かく契約を交わす必要があると思っています。
- Q5 国としては、どのように看取りを考えているのか?
- A 5 (国については)明確な事は解らないので、詳しい方がいらっしゃれば意見を聞きたいです。現時点では、施設への訪問看護ができるようになり、施設にも看取り加算がもうけられた事から、訪問看護ステーションがその一端を担っていくのではないかと考えています。



第3分科会総括

明治学院大学社会学部社会福祉学科教授 和気康太

第3分科会は司会進行役として瓜生さんと私、和気で担当いたしました。報告は和気がお話しさせて頂きたいと思います。

こちらの分科会は、「認知症ケア/介護と医療の連携」ということがテーマになっておりまして7つの報告がありました。個々の報告について細かくお話しすることはできませんが、最初の報告では認知症対応型のデイサービスでの新しい取り組み、夕食を食べて帰ろう、従来までの定型的な時間ではなくて、すこし伸ばしてそこで食事をすることによって利用者さんの生活を安定させていくという、新しい取り組みについての紹介がありました。

2番目の報告では新たなアセスメントシートを作ろうということで、今まで3段階とか色々なアセスメントのやり方があるのですが、その中から新しいものを生み出していくという取り組みについてのご報告がありました。

3番目は嚥下障害が起こるとグループホームではなかなか生活できなくなる。それを予防するために様々な取り組みをしていく、特に内視鏡を使って嚥下障害のところを見たり、きちんとモニタリングをしていくという取り組みが意味があるというご報告でした。

4番目は若年の認知症の通所介護サービスで、映画の「明日の記憶」というので有名になりましたが、どのような役割が求められるのかという報告でした。

5番目は小児がんの子供に対するMSW、医療ソーシャルワーカーがどう関わっていくべきかというお話しがありました。

6番目はALSという難病の方に対する介護、医療が当然連携を取るわけですが、そのための研修を開催しその効果に対する報告がありました。

7番目は看取りです。終末のケアですが、訪問看護ステーションとグループホームが協働 してどう看取りをしていくかについての報告でした。以上7つの報告でした。

高齢社会が超高齢社会になって、とりわけ後期高齢者が多くなりますと、認知症の方が多くなりますので、その認知症の方々に主にどのように対応したらいいのか、私の個人的な印象としては、現場の方々のいろんな日ごろの実践的な取組みの中でどういうニーズがあるのか、そしてそれに対してどういうサービスを提供していけばいいのか、誠実に、真摯な態度で利用者の方と向かい合う中で、医療の方々とも対話をしながらどういうようなサービスシ

ステムを作っていけばいいのか、どのような 実践を展開していけばいいのかということ についてのご報告があったように思います。 参加された方個々の感想はそれぞれ違いま すけれども、今お話した内容を共有し、これ からさらにそういう取り組みを広げていこ うという形の意欲というか姿勢がみられた というのが私の印象です。第3分科会のご報 告とさせていただきます。どうも有難うござ いました。



第4分科会 家族(介護者)支援/地域支援

進行役・助言者 : 辻本きく夫(世田谷区介護サービスネットワーク代表) 長谷川幹(成城リハビリテーションクリニック医師)

	発表者	所属	テーマ
1	森本 真知子	世田谷社会福祉士会	脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及 ぼす影響
2	禎 真奈美	世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション北沢	家族の力と訪問看護の役割 -家族生活力量アセスメントスケールを用いた評価と 家族の言葉から-
3	瀬田 みゆき 落合 美夏	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム (ショートステイ)	上北沢ホームショートステイの新たな役割 ~本人に焦点をあてたサービスを通して~
4	花野 悠 山本 喜和子	駒澤大学社会福祉学専攻	知的障害者授産施設の今とこれから -実習体験を通じての考察-
5	高橋 慶子	音楽療法実践グループ 宙(そら)	音楽療法の可能性《「デイ・ホーム芦花」K氏との出会 いを通して》
6	西村 誠	社会福祉法人嬉泉 世田谷区発達障害相談・療育セン ターげんき	世田谷区における発達障害に関わる地域支援
7	稲垣 清一池田 貴哉浜山 亜希子山北 順子山本 恵理	砧地域合同地区包括ケア・医療連 携会議実行委員会	認知症になっても安心して暮らせるまちづくり 〜顔の見える関係づくり〜

脳卒中患者の主介護者のエゴグラムが介護負担感に及ぼす影響

世田谷区社会福祉士会;森本真知子

1. 研究の背景と目的

脳血管疾患は日本における死因の第3位であり、罹患リスクは加齢に伴って増大することから、超高齢社会に向かって患者の増加が予想される。後遺症が残れば、家族介護者の介護負担は重いため、介護者の介護負担感を生じる要因を探り、家族の介護負担の軽減を図ることが重要となっている。

脳卒中患者の主介護者の主観的介護負担感と客観的介護負担感の違いに着目し、主介護者の介護負担感に対処方略(コーピング)や行動パターン(エゴグラム)がどのように関連しているかを明らかにし、在宅介護家族が安定した生活を維持継続することを可能にする要因を探ることを目的として研究を行った。

2. 研究方法

- 1) 調査対象と方法:都内4区の在宅脳卒中患者を介護する主介護者60名を対象。
- 2) 調査項目と尺度:要介護者と主介護者の属性について、介護負担感尺度は Zarit の介護負担感尺度日本語版、対処方略尺度は岡林らの対処方略尺度、エゴグラム尺度は新版 T EG II を用い、介護負担感との関連を検討した。

3. 結果と考察

主介護者のエゴグラムが介護負担感に関連するという結果は得られなかった。しかし、介護負担感と主介護者、要介護者の属性、コーピングと介護負担感、コーピングとエゴグラムなどには関連するという結果がみられた。

エゴグラムパターン N 型タイプは、介護役割の積極受容をしていないことがわかった。「No」と言えずに滅私奉公し我慢する N 型タイプにありがちで、客観的介護負担感よりも主観的介護負担感が大きいと感じる事例に当てはまると考える。公的支援追求も低いことから、抱え込んで燃え尽きになる危険性があるタイプと考える。

エゴグラムパターン逆 N 型タイプでは、私的支援追求が高かった。このタイプは統計的には有意差はなかったが、公的支援追求も高く、介護負担感の低い方であったことから、主観的介護負担感が客観的介護負担感よりも低いという事例に当てはまると考える。このタイプは責任感が強く、有能であり、一方自他共に厳しく、人への思いやりに欠けるタイプであるので、私的支援追求のコーピングが高いことが悪い面に出ると、家族などが振り回されてしまうことが懸念される。

まとめとしては、主介護者のエゴグラムが、直接、介護負担感に関連していなかったが、客観的介護負担感と主観的介護負担感のずれを生ずる一要因として介護者の行動・交流パターンの違いが関連することが推察できた。従って、エゴグラムを見ることで、行動・交流パターンを知り、そのタイプに現れたコーピング状況にそって的確な手段的・情緒的サポートを行うことは、より効果的な介護負担感の軽減につながると考える。

- Q1 逆N型の注意点はありますか?
- A1 本人の問題より、本人より私的支援を求められる周りに問題が起こるかもしれません。家族や関係が振り回されることがあるので、周りの人のサポートが必要です。
- Q2 現場でのアドバイスはありますか?
- A2 N型や逆N型というように人を決めつけてはならない。発表者(森本さん) は介護の立場で、人の話しをよく聞いて協力しながらやることが大切です。



家族の力と訪問看護の役割

―家族生活力量アセスメントスケールを用いた評価と家族の言葉から―

訪問看護ステーション北沢 禎 真奈美

近年、看護の対象を、個人からその個人を含む家族全体に広げて考えるようになり、家族看護に関する研究も進み、著書も多数出版されている。

そこで実際に、家族に目を向けた看護を展開できているのだろうか? ツール用いた家族アセスメントと家族の言葉から、看護を振り返り評価した。

1 目的

体験的に行ってきた家族への看護を評価することで、訪問看護師の役割を考える。

2 実践内容

- 1) 二人暮らしの娘が自宅で母親を看取った事例を『家族生活力量モデル―アセスメントスケールの活用法―』(家族ケア研究会:医学書院)を用いた評価と行った看護を振り返る。
- 2) 家族の言葉から介護する側の気持ちの変化を知る。

3 結果

- 1)家族は、介護経験の中から、その利用者や家庭の環境に適した介護技術を習得しており、新たな課題に対しても、助言があれば解決できる力を持っていた。
- 2) 家族は、その時々に介護する側の率直な気持ちを表現し受け止める相手として また、トラブルが起こったときに自分の判断や対応が正しいかを確認して安心 を得るための相手として看護師をとらえていた。
- 3) 関連機関と連携をとり、必要なときに必要なだけ支援を追加する臨機応変な対応が、信頼関係を築いてきた。
- 4) 家族の気持ちは、変化するのが自然であることを伝えたことで、看護師に対し 気持ちの変化を率直に表現していた。
- 5) 死別後、独居となった家族は一緒に故人の思い出を語る相手を求めていた。

4 考察

家族はもともと介護する力を持っている。潜在している家族の力を十分発揮できるよう働きかけていくことが訪問看護師の役割の一つではないだろうか。

そして、家族の力を信じること、関連機関との連携をとり臨機応変に対応できる準備をしておくことなどが、家族が力を発揮できるための支援につながると考える。

人は、自分の気持ちを言葉として表現することで、感情や考えが自ら整理されてくる。聞き上手な看護師でありたいと思う。

アセスメントツールを活用することで、家族の意外な一面に眼を向けることができ、習慣的に対応していたことの裏付けを学習することができた。

事例の場合、残された家族が独居になり、非常に不安定な状態である。家族の言葉「やる気が出ないのよね。」という言葉からグリーフケアの必要性も感じた。

- Q1 他のケースでのサポートは何かありますか?
- A1 個人個人が道で声をかけ、話しを聞くだけで気持ちが楽になります。
- Q2 事業所として取り組んでいるグリーフケアについて教えてください。
- A 2 グリーフケアは現在制度化されていないので、事業所としての取り組みはしていません。必要と思われるケースには担当者が声をかけてお話しを聞いたりしているのが現状です。今後事例のように看取り後独居になるケースが増えてくることが予想されます。そのため残された一人暮らしの高齢者を地域でどう支えるかが、これからの課題だと思います。

聴講者からの感想

離れて住んでいる姉が一人で親の介護をしているが、とても参考になった。(ひとりで介護する)姉の気持ちがわかりました。

助言者からのコメント

自分の病院では遺族の方が集まる機会を持っている。このような場(福祉学会)などを活用して地域のグリーフケアについて考えていく機会が少しずつ増えていくことを願います。



上北沢ホームショートステイの新たな役割 ~本人に焦点をあてたサービスを通して~

世田谷区立特別養護老人ホーム上北沢ホーム サービス係 瀬田みゆき・落合美夏

1 はじめに 課題提起

上北沢ホームショートステイでは、利用者自身に焦点をあてた個別ケアに取り組んでいる。

個別ケア充実のために行う利用期間前後のやりとりの中で、家族やケアマネジャーから、介護に関する相談をいただく機会が増えている。

上北沢ホームショートステイは、利用期間中に本人を「お預かりする」という家族のレスパイト目的の支援にとどまらず、在宅生活の充実や継続を支援するチームの一員として、特別養護老人ホームの機能を活用しながら、在宅介護に役立つ方法やケアプランなどを家族やケア担当者と一緒に考える役割を、積極的に担えないだろうか。

- 2 上北沢ホームが取り組んでいる新たなショートステイの役割とは
- ①多数の専門職によるケアマネジメント(情報収集、サービス提供、評価)ができる
- ②24時間365日体制で、直面する介護課題に集中的に相談に応じられる
- ③本人に対する具体的なプラン提案や、介護方法の工夫助言などができる

相談→多職種による情報収集・分析→サービス提供(試行)→評価→具体的提案

- 3 上北沢ホームの取り組み ~事例を通して~ すべての利用者が安心して過ごすことのできる「生活の場」=「在宅」の提供
- (1) 個別ケアプランに合わせたケア
 - ・本人の状況や希望に合わせた環境づくり
 - ・集団で過ごす「生活の場」の活用
 - ・個別の楽しみに応えるサービス
 - 特別養護老人ホームだからできるサービス
- (2) 家族やケアマネジャーからの相談対応例
 - ・ベッドや車椅子上での姿勢保持方法について(理学療法士、看護師、介護士等)
 - ・介護用品の適合助言や機種の選定について(理学療法士、看護師、介護士等)
 - ・口腔ケアの状況や方法の工夫、用具の選び方について(歯科衛生士、看護師等)
 - ・栄養バランスや献立の作り方について(管理栄養士、介護士等)
- (3) 家族との丁寧な情報のやりとり
 - ・利用前の在宅での状況の把握
 - ・利用中の情報提供
 - ・利用後の様子確認
- 4 むすびに 今後の取組みと課題

- Q1 システム化するまでにどれくらい時間がかかりましたか?
- A1 2年ほどかかりました。

助言者からのコメント

- ・すばらしい取り組みである。どこの施設でも、「ショートステイではこういうことをやってくれるんだ」と思われては困る。まずショートステイは安全に怪我なく過ごして自宅へ帰ることが理想だが、そのことさえ全ての施設ができているというわけではない。
- ・ようやくこのようなサービスを行う施設が出てきたと喜ばしい思いです。今後は このような取り組みを文書にするなどして、しっかりと公表していくことがよいと 思います。



知的障害者授産施設の今とこれから ―実習体験を通じての考察―

駒澤大学社会福祉学専攻 4 年 花野 悠 山本 喜和子

〈はじめに〉

社会福祉援助技術現場実習として、発表者は世田谷区と大田区の知的障害者授産施設でそれぞれ実習を行った。その中から見えてきた知的障害者授産施設の実際の姿と今後のあり方、地域ごとに異なる授産施設の現状と課題について発表する。

〈実習先とその事業の概要〉

- ①大田区立うめのき園
- ・利用対象者 18歳以上の知的障害者で、原則として自力通園が可能な方
- ·援助内容 就労継続支援B型

生活支援(日常生活習慣の習得、余暇活動、社会性の拡大) 作業支援(公園清掃、自主生産、ギフト製品組立、中華菓子袋詰め他) 行事(宿泊・外出訓練、スポーツ大会、クリスマス会、園祭他)

- ②世田谷区立下馬福祉工房
- ・利用対象者 18歳以上の知的障害者で、施設受給者証を有し、一人で通所できる方
- ・援助内容 就労移行支援・就労継続支援B型

生活支援

作業支援(公園清掃、クッキー・ケーキ作り、計量・袋詰め作業、ビーズアクセ サリー他)

行事(日帰り・一泊旅行、納涼会、忘年会、おたがいさまフェスタ、アート展参加、買い物、自然教室他)

〈知的障害者授産施設の現状とこれからについての考察〉

- ①うめのき園での実習体験から
- ・職員は、朝礼から終礼まで、常に利用者のことを見ている姿勢が感じられた。特に 終礼では利用者についての情報共有がしっかりなされていた。また職員と利用者・ 家族の間で、強い信頼関係が存在していた。
- ・大田区では月1回の就労促進担当会議が行われている。また施設でも月に2回、就 労支援プログラムが行われており、具体的な個別支援が行われている。就労に向け て、手厚いサポート体制があると感じた。
- ・利用者の工賃はやはり安い。また一人暮らしの方の場合、QOLをどう高めていく のかが、自立に向けての課題だと思われる。
- ②下馬福祉工房での実習体験から
- ・職員のチームワークは、とても良い。朝の勉強会では、施設長を筆頭にさまざまな 学習が行われ、資質向上の努力を感じることができた。職員は、まさに黒子のよう に、利用者が主体的に過ごせるようにしており、支援者としての姿勢を学ぶことが できた。
- ・連絡帳や家族会などを通じて、家族支援にも力を入れているが、家族と施設との意 見の違いなどもあり、授産施設運営の難しさも感じた。
- ・ボランティアの数が非常に多く、地域に開かれた施設だった。また、地域のイベントへの参加、自治会との交流もある。施設が積極的に地域に出ていくことが、障害者施設の発展の鍵の1つであると感じられた。

- <質疑応答>

- Q1 大学と現場の違いはどのようなことですか?
- A1 教科書は字や数字でしかわかりません。実際には40人いる施設で就労している方は1人ということにショックを受けました。
- Q2 家族と施設の意見の違いは何をどう感じましたか?
- A2 一般的に生活する力を早くつけてほしいと思う親の気持ちもよくわかりますが、利用者が苦しむのでは意味がありません。今考えなければならないのは、結果をすぐ求めるのではなく、自らが行動するのを焦らず見守ることが大切だと思います。
- Q3 これからどうしていきたいと思っていますか?
- A3 いろいろな機関との連携や繋がりが大切だということです。

助言者からのコメント 若い人が必要なので、経験を積んで試験に頑張って受かってください。



音楽療法の可能性《「デイ・ホーム芦花」K氏との出会いを通して》

音楽療法実践グループ 「宙」: 高橋 慶子、竹上 秋彦

音楽療法の目的】

2003年10月より約2年半に渡り、「デイ・ホーム芦花」において、セラピスト2名で、40人前後の60代から90代までの高齢者を対象とした「音楽療法」を試みたが、個別の対応が難しく「音楽レクリエーション」としての色合いが濃かった。

その後、上記について、施設の理解を頂き、2006年4月より、10人~20人前後のグループでの「個別対応を大切にした音楽療法」を実践することになった。現在では、参加者が自らの力を確認し、その日のセッション場面の中で生まれる様々な交流を通して、参加者相互に影響し合い、より生き生きすること。また、それが、参加者の実生活で何らかの力になる「参加者の心の内面に向き合う音楽療法」を目指している。方法】

①月曜・火曜・水曜の3グループに分け、各月2回(計・月6回)行う。②午前中の3つのプログラム「マシーントレーニング」「転倒予防体操」「音楽療法」より主に参加者が選択して参加する。③参加人数は、10人~20人前後(10人以下でも可)セラピスト2名、施設スタッフ1名~2名で行う。④対象者は60歳~90歳前後の高齢者。⑤歌詞幕・鍵盤楽器の延長線上に、1重の円形になるよう座席を設定する。⑥参加者の長期記憶に響く曲を用意するが、その日生まれたリクエストを、より大切に選曲していく。即興的に対応する場合もある。⑦音楽を通して参加者の内面に起こる「様々な思いや動き」を大切にし、グループ全体で味わっていく。⑧グループのその日の特性をふまえ、全体的に集中できるよう、プログラムを選択する。

経過および結果】

「デイ・ホーム芦花」K氏の様子を通して振り返る。

2007年2月5日(初回)・・・表情が硬くうつろな目をして、1点を見つめていた。 同年3月20日(5回目)・・・穏やかに参加される。笑顔が増え、声も大きくなり 表情も柔らかくなった。

- 2008年3月(月曜・火曜参加で通算33回目)・・・歌声がのびやかになってきた。 笑顔が増えセラピストの問いかけにも自然に答える。集中度が高く、 リラックスして参加するようになった。
- 2008年4月以降・・・K氏の参加頻度は減ったが、現在、デイ・ホーム内でのK氏は、 友人と楽しそうに談笑している。セッションに参加されるK氏は、 リラックスし、笑顔も豊かで、参加者への配慮を伴いつつ、自発的に 参加し、他者の世話もする。

音楽療法の可能性に対する考察】

K氏と向き合う中で、セラピストは表出しているK氏の様子と、K氏が内面に抱えている問題のどちらにも思いを向けながら、曲を選び、歌唱してからの言葉かけや、声のトーンにも配慮した。結果、K氏の緊張もほぐれ、「今ここにいる実感」をセッションに参加した人と分かち合い、味わった。その実感が再び音楽の力をかりて、K氏の力になったと考えられる。

音楽療法の場面では、参加者の様々な表情やその変化に出会う。

人間の力は、他者との交流によって自覚され、その人を活性化していく。音楽はあらゆる人の心に響き、「思い」を代弁することもある。その音楽を、セラピストからの一方方向だけでなく、グループ全体で味わい共有し、参加者個々の内面から生まれた音楽も大切にする中で、参加者が相互に交流する時、音楽療法としての可能性は、その「参加者の数だけある」と言えるのではないだろうか。

- <質疑応答>

- Q1 セラピストの資格とはどのようなものですか?
- A1 日本においては、まだミュージックセラピスト(音楽療法士)は国家認定の 資格ではありません。現在は、日本音楽療法学会認定の音楽療法士が活動し ていますし、学校認定、地域認定の音楽療法士も活動しています。
- Q2 一般的療法ではなく、いろいろな可能性の療法なのしょうか?
- A2 音楽は脳全体に響くので、様々な療法としての可能性を秘めています。行動療法的音楽療法であれば、動きにくい身体の部位・思いが届きにくい部位を動かしていけるように、心理療法的音楽療法であれば、クライアントが自分らしく生き生き過ごせるように、それぞれにサポートしていく療法です。
- Q3 ドイツでは国家資格できちんとしているが、日本ではレクリエイションを音楽療法と言っているのではないでしょうか?
- A3 今はまだ、日本の音楽療法は国家資格ではありませんが、ほとんどの音楽療法士は、そのクライエント・グループに合った目的を設定し、その上で、ふさわしいアプローチを選択して関わっていきます。又、病院で、医師と相談して音楽療法を実践している場合もあります。レクリエイションであるか音楽療法であるかは、クライアントや施設・音楽療法士のスタンスによって決まってくるのではないかと考えています。

助言者からのコメント ぜひ国家資格として日本でも受け入れてほしい。



世田谷区における発達障害に関わる地域支援

世田谷区発達障害相談・療育センター 地域事業部 西村 誠

- 1、 発表概要) 地域支援の必要性~発達障害は、外見上わかりにくいため、周囲の人から「やる気がない」「ふざけている」「落ち着きがない」「躾がなってない」「怠けている」などの誤解を受けやすい。それにより本人・保護者は、地域での暮しに大変な生きにくさを感じているため、地域の人たちの理解が必要とされる。これらを軽減、解消すべく、当センターは下記の活動を行ってきた。
- ① 関係機関支援として、子どもや保護者に関わる関係機関を対象に巡回技術支援を実施。
- ②人材育成として、子どもや本人、保護者に関わる支援者を対象に支援者研修を実施。
- ③障害理解促進として、一般区民を対象にパンフレット、広報紙、ホームページの作成、講演会、シンポジウムの開催、区作成物への助言等を実施。
- ④家族支援として、当センター利用者、及びそれ以外の保護者を対象に連続学習会、 子育て体験懇話会の実施。
- 2、振り返りおよび目的~昨年、今年と、多くの人に発達障害の理解を促すための講演を、田中哲氏、高山恵子氏にお願いし、来場者より大変好評を得ることができた。関係機関連携としては、保育所や学校等の連携を行ってきたが、まだ開所して1年半余りということもあり、努力はしているものの十分に連携が取れていないのが現状である。また、相談支援や電話応対等への難しさも痛感しており、今後センターは相談支援体制整備のため、豊富な相談実績のある「嬉泉」のスーパービジョン体制の導入を機に、幅広い年齢層への対応を可能とし、今後も難しい相談等に対処していきたい。そして当事者及びその家族にとってストレスの少ない、生きやすい生活環境の確保を支援していきたい。
- 3、今後の課題~発達障害は、早期発見、早期療育に繋げることが望ましいが、発達障害自体が広く認知されていない状況では、早期発見が難しいことなどが課題と言える。区民が発達障害について正しい知識と理解できる方策の構築が望まれるが、認知度が低いがゆえに、ネガティブなイメージで捉えられ易い。また、差別やいじめの対象になりやすいがために、発達障害の疑いのある当事者の顕在化を阻む要因の一つとも言えるのではないか。これらのイメージの払拭を含め、発達障害の正しい理解と浸透を今後の課題とし考えていく。また委託された民間法人嬉泉としては、フットワークの軽さ、アイディアの出し易さを生かし、世田谷地域独自の地域支援の様々な内容を作ることが課題と言える。

- Q1 小学校から中学校に上がるときの調整はしていますか?
- A1 学校や家族と調整しています。
- Q2 幅広い年齢層とはどれくらいですか?
- A2 18歳までが原則ですが、成人の方の相談も受けています。
- Q3 世田谷にはどのくらい発達障害の子がいるのですか?
- A3 ネガティブな問題なので詳しい人数は出ません。



認知症になっても安心して暮らせるまちづくり ~顔の見える関係づくり~

砧地域合同地区包括ケア・医療連携会議 実行委員会:稲垣 清一 池田 貴哉

浜山亜希子山北順子山本恵理

平成22年9月18日(土)「砧地域ご近所フォーラム2010 地域で支える認知症 ~顔の見える関係づくり~」が成城ホールで開催された。このフォーラムは、砧地域の医師会・歯科医師会・薬剤師会・ケアマネジャーや訪問介護などの介護保険事業者・社会福祉協議会・保健福祉課・あんしんすこやかセンターとその運営法人からなる「砧地域合同地区包括ケア・医療連携会議 実行委員会」が開催した。

認知症になっても安心して暮らせるまちづくりをすること、高齢者福祉サービスの 提供者・支援者のネットワークをつくること、認知症やサービスを提供する社会資源 について地域の方々に正しい理解を深めていただくことなどを目的に開催した。

当日は、まず第1部で長谷川和夫先生による「認知症の正しい理解とまちづくり」 と題した基調講演を聴いた。第2部では、認知症の理解を深める手作りのコントと参加者との懇談をおこなった。コントでは、医師の役は医師が、歯科医の役は歯科医が、薬剤師の役は薬剤師が演じた。また会場ロビーでは、認知症に関わる砧地域のさまざまな職種がブースを出展した。実際に地域で認知症に関わる人たちが、地域住民にアピールして顔の見える関係になることに意義があると考えた。

参加者は約250名にのぼった。アンケート結果は「良かった」「参考になった」「地域の支えあいが大切だと思った」「続けてほしい」と好評であった。

このフォーラムが開催できたのは、今まで培ってきた医療・介護・福祉の連携の土壌があったからである。砧地域では、平成18年度から年2回、「砧地域合同地区包括ケア会議」を開催してきた。はじめは「医師とケアマネの懇談会」であったが、歯科医師・薬剤師・MSW・訪問看護師・・と徐々に参加者を増やしていった。そして、職種の枠を越えてお互いの顔や役割を知り、連携の必要性についての認識を高めていった。そんな中で「地域で支えていくための集まりをつくりましょう」という提案がなされたのである。

こうして生まれた「砧地域合同地区包括ケア・医療連携会議」は、1年かけて、砧地域に必要なものは何か、専門職が連携してできることは何か考えてきた。認知症はまさに、専門職が連携し、地域の方々とともに支えあっていかなければならない課題であった。

こうした一歩一歩の継続的な取組みが、フォーラムにつながった。いま「砧地域合同地区包括ケア・医療連携会議」は、認知症になっても、医療や介護が必要になっても、安心して暮らせる砧地域をつくっていくために、次の一歩を進めていきたいと考えている。

- Q1 続けていく中でいろいろ困難があったと思うが、それをどう乗り越えましたか?
- A1 1箇所だけではなく、協力し合うことで乗り越えることができたと思います。
- Q2 医師との関係はどうなりましたか?
- A2 距離が縮まりました。

助言者からのコメント

札幌でも職種間連携を進めている。そういう例を参考にしたらどうか。また、砧から世田谷区全体に広がってほしい。

会場からの意見

実行委員長としてご近所フォーラムに関わったが、イベントをやることによってまとまることができました。



第4分科会総括

成城リハビリテーションクリニック医師 長谷川 幹

第4分科会は「家族(介護者)支援/地域支援」ということで、私と辻本さんで進行役を仰せつかっています。発表は7番までありまして、簡単にポイントなどをお話ししたいと思います。

最初は脳卒中の介護者の負担感をどういうふうに見ていくかということと、それと同時に、 我々は援助者としてどのように配慮していくかの視点だと思いました。

2番目は、家族の力ということで家族生活力というものに視点を合わせて、7年に渡って関わった事例を非常に丁寧に発表していただき、最後にグリーフケアを大切にしなければいけないという問題提起があり、大きな拍手がわきました。これは世田谷でも考えていく必要があると思います。

3番目は、上北沢ホームの報告です。ショートステイに入ってこられた人を、多職種がいるという利点を生かして、車いすをもう一回再検討しようとか、栄養がどうなっているかとかを検討して、それで在宅に帰そうという新しい試みが始まっています。

4番目は学生の実習体験の発表です。先輩の方々の温かい励まし、やや鋭い質問がありましたが、それにたじろがずきちんと答えられた若い学生の方に非常に印象深かったです。

5番目は音楽療法です。従来、音楽のリクリエーションという形はあるけれど、きちんと セラピーということに焦点を合わせて1事例を中心にしながら発表されました。おそらく、 これは今後日本でも広がっていくかと思います。心を開くという視点が、一方ではなく、双 方向の関係性のなかでやっていることが大変興味深いところです。

6番目が高次脳発達障害という地域支援をされている報告でした。まだまだ外見からはわかりにくいとか、差別とか問題があるということで、広がり方をどうしていけばいいのかという問題提起をいただきました。

7番目が砧地域で5つの地域包括支援センターが中心になって、医師、歯科医師、薬剤師、 様々な人たちの応援を得ながら今年の9月にフォーラムを開き、3,4年かけてそこまで到

達したという発表がありました。250名 というほんとに沢山の人を集められまして、 今後の新しい世田谷区の連携のあり方を示 唆していると思います。

いずれも先駆的な要素をもちながら、世田谷にはこういう人がいて、この人たちが中心になりながら地域を広げていけば、かなりの力になるという印象を持ちました第4分科会です。以上で報告を終わります。



第5分科会 地域で支える/ボランティア

進行役・助言者 : 植田祐二(世田谷高次脳機能障害連絡協議会)

小澤弘美(社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会地域福祉部長)

	発表者	所属	テーマ	
1	森川 敦子	世田谷区社会福祉事業団	結ぶ つながる 施設と地域	
	新津 紀子	特別養護老人ホーム上北沢ホーム	~上北沢ホームとボランティア~	
2	太田 恵津子	世田谷ボランティア協会		
		代田ボランティアビューロー	セラピードッグカフェ「ころん」の活動について	
3	三浦 覚	特別養護老人ホーム さつき荘	ボランティア 1000 の取り組み~人と人との繋がりが	
3	板垣 達也	付別後暖七八かり、台ででは	起こした相乗効果~	
		ふれあいいきいきサロン「豪徳寺コス		
4	高久保 道子	もれの会」 (社会福祉法人世田谷区社	「私たちの活動の強み」~長く続いている秘訣~	
		会福祉協議会)		
5	小山 直美	日本大学文理学部	労生が問して同僚士長の左り士について	
Э	鈴木 悠美	心理学科、社会学科 社会福祉コース	学生が関わる国際支援の在り方について	
			地域における看護師による「見守り訪問」の役割と今	
	矢野 美紀代	世田谷区社会福祉事業団	後の在り方	
6		訪問看護ステーションけやき	-全高齢者実態把握事業(すこやか訪問)の実践から	
			_	
7	植田 祐二	社会福祉法人世田谷ボランティア協	デイサービスにおける高次脳機能障害者の商店街を	
'		会 ケアセンターwith	活用しての回復プログラム	

結ぶ つながる 施設と地域 ~上北沢ホームとボランティア~

世田谷区立特別養護老人ホーム上北沢ホーム 森川敦子、新津紀子

- 1 はじめに ボランティア担当者がよくいただく質問から…
 - 1歳から80歳代まで年間延べ3400人を超えるボランティアさん? 「どうやって集めるのですか」「職員は、どのくらい仕事が楽になりますか」 …いずれも答えに窮します。

上北沢ホームでは、ボランティア(以下「そよかぜ上北」)と、利用者、職員、施設、地域、そよかぜ上北同士が、施設の内外で様々な関係を地道に積み重ねています。

これらの関係づくりを支援するボランティア担当者としての視点から、それぞれの 関係性に焦点をあて、そよかぜ上北の活動について報告を行います。

- 2 「そよかぜ上北」とは上北沢ホームボランティアの皆様が決めたご自分たちの呼称です。
- 3 上北沢ホームにとってのそよかぜ上北の存在
 - ① 外からの新しい風を運んできてくださる大切な存在
 - ② 利用者のいきいきした生活を支える大切な仲間
 - ③ 利用者にとって親しみのある馴染みの存在
- 4 上北沢ホームボランティアの現況
- (1) ボランティア活動状況
- (2) ボランティア活動のしくみ
- (3) ボランティア活動アンケート調査結果より
- 5 ボランティア担当者の主な役割
- (1) そよかぜ上北お一人おひとりの"気持ち"のサポート
- (2) ホーム利用者の人権を守る施設責任の遂行
- (3) そよかぜ上北活動充実のための環境整備
- 6 そよかぜ上北、利用者、職員、施設、地域の関係性の変化(エコマップを使って)
- 7 むすび 課題と展望

- Q1 ボランティアの実人数370人はすごい。ボランティアに適切な支援を行う ためのタイミングはいつがいいですか?
- A1 初回面接がとても大切。希望を聞くだけではなく、活動ルールを伝えます。 活動開始後は、入所者や職員、施設の変化等を見逃さず、ぞれぞれのボラン ティアに、その変化等を具体的にこまめに伝えていくことに力を注いでい ます。

助言者からのコメント

ボランティア活動が主体的に行われている。その結果、今度は施設の方から地域に 出て行くという相乗効果が生まれている。「ボランティアは施設の仕事の下請けで はない」とおっしゃる通り、施設とボランティアの関係が、昔とは変わってきたの だと思う。



セラピードッグカフェ「ころん」の活動について

発表者所属:世田谷ボランティア協会 代田ボランティアビューロー;太田恵津子 共同研究者所属:ボランティアグループセラピードッグカフェ「ころん」 : 野澤みき江、須貝直義

【本文】

内容:地域の犬好きの方々が集い、ふれあえる場所として、代田ボランティアビューロー1階にてドッグカフェを開催しており、犬と飼い主さん、犬が飼いたくても飼えない方、犬と一緒にボランティアをしてみたい方など犬が好きな方が参加、近隣のグループホームの高齢者の方々も毎回散歩がてら来所され犬とのふれあいを楽しんでいる。コーヒー・お茶・お菓子の準備、カフェスペースの場所づくり、参加者へのお茶のサービスなどすべてボランティアの力で運営、経費を差し引いた残りの参加費は年度末に区内で動物保護の活動をしている団体などに寄付をしている。

(毎月第2・4 土曜日の10:30~12:00 参加費200円)

活動のきっかけと目的: 2006 年 3 月 25 日、講師に国際セラピードッグ協会の大木トオル氏を迎え、人と犬との幸せの絆を考えるボランティア講座「セラピードッグ講座」を開催した。その参加者に、「犬と一緒にできるボランティアについて考えてみませんか。」と呼びかけたところ、7 人の方々が集まり、犬の飼い主が普通の家庭犬と無理をしないで楽しみつつ、地域のためにできることについて意見交換した結果、セラピードッグカフェ「ころん」が誕生することになった。

結果:活動は4年半続いていて、毎回元気なボランティア犬の姿に参加者の笑顔が広がる光景が見られ、犬の散歩時などの口コミで参加者・犬も増えている。この活動をきっかけとして、近隣の防犯のために散歩の際に気を配る「わんわんパトロール隊」が2008年に結成された。また、参加ボランティアさんの中から、人間に裏切られて捨てられる多くの犬や猫の現実を社会に向けて発信したい、という声が上がり、本年7月31日と8月1日、大阪府在住のフォトジャーナリスト児玉小枝さんから写真をお借りして「犬のラストメッセージ写真展」を開催した。保健所に収容されて最期を迎える殺処分直前の犬達の悲しいまなざしの写真、保護活動グループに救助され、譲渡会を経て新しい家族に巡り会えた幸せな子の写真、家族の愛に包まれて人生というか犬生の最期の時を迎えつつある老犬の姿の写真など、約70点の写真展示であった。事前準備、当日、後片付けまで「ころん」のメンバー、中学生、高校生、大学生のボランティアさん達、多くの力により、開催することが出来、両日で200名以上の来場者があった。

考察:世田谷区内には大きな公園があるためか、犬の登録数が多い。しつけをきちんとして飼うことや散歩のマナーを守ることなどは人と犬との共生のために欠かせないことである。その上で犬の可愛さやふわふわの毛並みにふれあうことで人の心を豊かにしてくれることをより多くの方々に知っていただく場、そして飼い始めたら家族として最期まで責任と愛情をもって共に暮らすことなどを発信していく場として今後も活動を継続していきたい。

- Q1 高齢者で犬を飼っている人が多いが、ケアをできていない場合が多い。施設 に入るとき、犬を保護するという活動はありますか?
- A1 ころんに関しては行っていません。預かってくれる方へ資金援助などは必要です。個別に相談を受けることは可能です。
- Q2 学習会から自主グループが生まれることが素敵です。他にはありますか?
- A2 ボランティア講座からボランティアに繋げることが基本です。ウクレレ講座 などが最近ありました。

助言者からのコメント

かわいいだけでなく命の問題にすることは人間にも言えることです。こういう活動 を通して生命の大切さに気がつくと思います。



ボランティア1000の取り組み ~人と人との繋がりが起こした相乗効果~

特別養護老人ホームさつき荘;三浦 覚 板垣 達也

【本文】

さつき荘では、昨年度の始めに「ボランティア1000」という目標を掲げ、ボランティアの増加・活動内容の拡大に努めて参りました。その目的とは…利用者の平均要介護度4.3という重度高齢化の中、言葉を発せない方々・1日の大半をベッド上で過ごされる方々・記憶や時間という狭間で混乱される方々に「長生きしてよかった~」との「幸せ」を実感してもらうことに他なりません。その為には日々のケアの質・ケアの幅の充実が絶対条件であり、そのパートナー・協力者として「ボランティア」の存在が必要不可欠であると私達は考えました。「たくさんのボランティアに来荘してもらう」、そして「たくさんの人の力で利用者を支え合う」これこそが「ボランティア1000の取り組み」ということです。

ボランティア1000活動は、ボランティア委員 2名を中心に昨年の4月からスタートしました。方針と具体的展開に沿い、3つのポイントを重点に活動していきました。まずは1つ目のポイント…ボランティアの新規開拓に向けた、地域とのネットワーク作りです。玉川ボランティアビューロー・世田谷ボランティアセンター・近所の保育園など「地域」に出向き、今回の「ボランティア1000活動」について説明・協力を求めました。次に2つ目のポイント…現在活動してくださっているボランティアへのアプローチです。定着と継続的活動を目的に、ボランティアアンケートを作成、インタビューやボランティアニーズの把握に努めました。最後は3つ目のポイント…職員のボランティアに対するおもてなしの姿勢や接遇マナーの充実です。内部研修などを多く開催し、いかにボランティアが重要な存在か…いかに素晴らしい社会資源か…などを発信しました。このように外部・内部問わず積極的に活動したことにより、年度末には前年比(642)の1.80倍であるボランティア来荘者総数1162、「ボランティア1000」を達成することができました。

今回の発表では、ボランティア1000の取り組みが生み出した「人と人との繋がり」・地域連携の充実・数々の相乗効果・明確となった点と新たな課題・それを踏まえた今年度の取り組みなど、その詳細をお伝えしたいと思います。

- Q1 施設全体でボランティアについて話し合いますか?
- A1 内部研修、そういう風土をトップが作ってくれます。ホスピタリティが標準 化されてきています。
- Q2 ボランティアに対する試みと経営はどこまで食い込んでいますか?
- A2 マンパワーの計算はしていません。
- Q3 ボランティアはさつき荘の中でどういう位置ですか?
- A3 地域交流の位置です。
- Q4 地域に出ていくプロジェクトは組みますか?
- A4 介護員の地位向上が目的でした。
- Q5 「おもてなしの姿勢」とはどのようなことですか?
- A 5 どうやれば喜んでくれるか、気持ちをくみ取れるかということです。すべて の介護員に言えることです。



「私たちの活動の強み」~長く続いている秘訣~

ふれあいいきいきサロン「豪徳寺コスモスの会」: 高久保 道子

発表内容

- (1) 設立経緯
- (2)活動内容
- (3)活動をとおして思うこと
- (4)活動での工夫・心がけていること
- (5) 私たちの活動の強み 〜強みを認識して地域のネットワークづくり〜
- (6) これからの方向 〜緩やかな見守りに向けて〜

ふれあいいきいきサロンとは

世田谷区社会福祉協議会が支援する地域支えあい活動の一つで、高齢者、障害者、子 育て中の方が住み慣れた地域でいつまでも安心して生活できるよう、区民のみなさんが 自主的、自発的に行う活動です。地域住民同士が交流を深めることで、地域の中で顔見 知りの関係ができ、孤独、閉じこもりの防止等の効果が期待されています。

(平成22年11月4日現在のサロン登録数494グループ)

世田谷区社会福祉協議会ホームページより

- Q1 新しい人の参加や知らない方を誘うことについてはどうしていますか?
- A1 スタッフである民生委員を中心に、閉じこもりがちな方に、ご近所の関係で広く声掛けをしています。初めて来た方にも「どうぞ」と門を開くとともに、スタッフの方がはやく溶け込めるよう上手に対応してくれています。
- Q2 女性の方が多いが、男性の方はどうですか?
- A2 夫婦が2組いる。1人が通っていて、もう一人が通うようになったパターン もあります。絶対数はまだ少ないが、今後は、より一層男性参加者が増える よう取り組んでいきたいです。
- Q3 すごい人数だが、困っていることはありますか?
- A3 運営財源には苦労している部分もあるが、スタッフの創意工夫で補っています。参加者からは一人300円の参加費をいただいています。また、社協からは月1,000円(1回あたり)だが、4~5人のところでも額が同じである。社協の財源にも限りがあることから、この点は了解している。

助言者からのコメント

活動団体への助成金額を見直すことは、今のところ難しい面もあります。社協は助成金以外にも団体を支援する取り組みを行っており、担当職員のパワーとハートで団体運営を支えて行きたいです。



学生が関わる国際支援の在り方について

日本大学文理学部学生国際ボランティアグループ Salamat"A" 日本大学文理学部心理学科4年 小山 直美 日本大学文理学部社会学科3年 鈴木 悠美

1. 活動の目的

私たちの目的は2つある。1点目は、多くの学生や市民の手によって国際支援としての子どもの教育や地域支援を実現すること、2点目は私たち自身が海外支援に関わることにより、グローバルな視点から様々な問題を見つめ考えること。

2. 実践内容

今年の活動の報告と同時に、去年との比較、感じたことを報告する。

- ①ワークキャンプ
- ②フリーマーケット
- ③桜麗祭
- ④企業訪問
- ⑤CM コンクール参加
- ⑥勉強会

2. 結果·考察

ワールド・ビジョン・ジャパン(以下、WVJ)が撤退した後、Salamat "A"として直接関わることになる。今回の現地ワークキャンプでは、現地住民組織が抱く将来のビジョンや今後の組織運営について理解することができた。また数年にわたり交流してきた結果、チャイルドスポンサーシップ(奨学金)を通して支援してきたチャイルドの成長をともに喜ぶことが出来た。スタッフとの間にも信頼関係が築かれてきたと感じている。同時に日本人を代表してきているという責任の重さも同時に痛感した。

今年は初めて日本での活動も活発に行った。フリーマーケットに出店した際、多くの方に声をかけていただき、また学部祭にて以前から知っているとおっしゃってくれた方もいた。少しずつながら活動の認知が広がっているのを実感できた。地域に積極的に出ていく大切さ、私たちの活動を通じて現地のことを知ってもらう重要性を学ぶことが出来た。

3. 今後の課題

これまで WVJ を通して現地と関わってきたが、2010 年 9 月末で WVJ の支援が終了した。私たちは今後も現地と関わっていくことを決定したが、私たちはどのように関わっていけるかいまだ模索中である。現地住民組織が掲げるビジョンに対して私たちにできるアプローチの方法も考えていく必要がある。

また、日本での活動もより広げ多くの人に現地の様子や私たちが実際に行って感じたこと・気付きを伝えることにより、国際支援について考えてもらうきっかけをつくっていきたい。そのために、私たち自身が現地を知り逆に日本を理解する勉強も今まで以上に行う必要がある。

- Q1 海外から来た親、たとえば言葉で困っている親への支援は考えていますか?
- A1 現地の活動を重視するので、今のところ考えていません。
- Q2 フィリピン現地商品販売以外に日本で行っている活動はありますか?
- A 2 今始ったばかりだが、現地住民組織を支えるプロジェクト(寄付により現地を支える)を行っています。これからももっと広げていく予定です。
- Q3 他の学生団体との交流はありますか?
- A3 今はあまりありません。しかし、これからしていきたいです。
- Q4 現地訪問に行くのは何名ですか?
- A 4 昨日は23名でした。

助言者からのコメント

世田谷区にも多くのボランティア団体がある。ボランティアセンターや協会のようなところもある。そして、ボランティア団体ネットワークも現在作っている。交流会もある。これから他団体との交流もさらに広げて頑張っていただきたい。



地域における看護師による「見守り訪問」の役割と今後の在り方 — 全高齢者実態把握事業(すこやか訪問)の実践から —

発表者:訪問看護ステーションけやき 矢野美紀代

共同研究者:訪問看護ステーションけやき 佐藤 正子

訪問看護ステーションけやき 中込 祐子

私たち訪問看護師は、平成21年10月~平成22年3月まで「すこやか訪問事業」を実施した。この事業は、世田谷区が昨年7月~8月にかけて、65歳以上の全高齢者を対象に郵送により行った、「世田谷区全高齢者実態把握調査」の結果を受けて行ったものである。区からの委託を受け、支援が必要と思われる高齢者宅を看護師が訪問し、介護予防の観点から健康相談を行い、見守りや支援の体制を早期に構築することを目標として実態把握を行った。

訪問を快く承諾してくださった方、またいろいろな理由から今回の訪問はキャンセルされた方などさまざまな状況の中で、それぞれのケースに何らかの形で介護予防につながるアプローチが出来たのではないかと思う。

訪問の結果により、早期に支援が必要と判断した場合は、本人の同意を得て「あんしんすこやかセンター」に情報を伝え、連携した支援につながったと考える。

また、支援が必要な状況であるにもかかわらず、「人に甘えてはいけない」と支援を受けることを拒否されるケースもあり、そんな時は SOS の発信先である「あんしんすこやかセンター」を案内し、いつでも相談出来る場所があることを伝えた。

今回の「すこやか訪問事業」を実施し、看護師の視点で生活機能や健康状態に着目し、お一人おひとりに対応した相談や助言についての実践を、改めて振り返り、その中から見えてきた、地域における「見守り訪問看護師」の役割と今後の課題について考察したのでここに報告する。

<質疑応答>

- Q1 我慢は美徳という考えがまだまだ残る中で、そういった方へのアプローチは 難しいですか?
- A1 やはり難しいです。高齢者への定期的な訪問が廃止にもなってきているが、 潜在的なニーズや支援の必要性を発見するためにも訪問はやはり大切です。
- Q2 A1の内容は地域ネットワークを作っていきたいということでよいですかか?
- A2 そうです。

助言者からのコメント

行っている支援で、その結果、状態が良くなってきたら地域の方とつながれるようにネットワークを作っていくということも必要だと思います。また、地域にどのようなネットワークや機関があるのかもよく把握して、これから繋がりを強めていっていただきたいと思う。



デイサービスにおける高次脳機能障害者の商店街を活用しての回復プログラム

ケアセンターwith 施設長;植田祐二

高次脳機能障害者への支援として、介護保険法通所介護事業を用いて「ケアセンターwith」は、社会福祉法人世田谷ボランティア協会、が2007年3月に、九品仏商店街の中に開所し、今日までに至る。

当協会では、「高次脳機能障害者センターwith 新規事業検討委員会」(座長;長谷川幹リハビリ医師)を立ち上げ、高次脳機能障害者に対する支援を、11名の委員と論議を重ね「ケアセンターwith」の開所に至った。その背景には、制度の狭間にありサービスを受けられなかった高次脳機能障害者が多く存在した。また、65歳で障害者サービスが終了することから、それ以降継続した専門的なケアを受けられない方々が存在した。社会福祉法人世田谷ボランティア協会では、いまだ支援を受けることのない高次脳機能障害者への支援体制を作り、介護保険法の通所介護事業を開始した。

実践内容の特色として、1. 自己決定・自己選択のプログラムづくり 2. 個々に応じたプログラムの作成 3. 商店街とのかかわり・役割を持つの中で回復へ向かうプログラム の3点を中心に実践してきた。特に3. の商店街とのかかわり・役割の中でのプログラムの実施は、立地条件から「ケアセンターwith」らしいプログラムとして効果を生み始めている。

本学会の中で、デイサービスが市民との繋がりの中で効果が見える実践内容の紹介や、商店街との関係のアンケート調査結果をとおし、地域の中でデイサービスがどのような役割を担っていくべきかを考察したい。

<質疑応答>

- Q1 こちら桜上水の方にも来ていただきたい。来る予定、拡大予定はあるか?
- A1 高次脳機能障害者の方へ、病態を含めて理解ある対応をする場所がなくwithに対する期待・希望の声が多く聞こえてきます。現在小規模なので、規模の大きなものか、北のほうにもう一か所か、欲しいと思っています。ケアセンターwithを運営いたします社会福祉法人世田谷ボランティア協会では、それに向けた検討委員会発足の計画があります。私どももぜひやっていきたいと思います。
- Q2 地域に受け入れられている感じがしますが、うまくいった理由はありますか?また、工夫されていることはあるか。
- A 2 商店街会長含め、商店街の方々のお人柄がとても良かったに尽きると思います。また利用者さんが積極的に商店街に出かけ、お話をされておられるのが効果あったように思います。

助言者からのコメント

地域の中でやるというのはとても大切なので、商店街でやっていることはとてもいいことだと思う。商店街は、地域に密接な場所で、多くの人も行き来するので、その中に位置していることは実に役割期待が増えます。まだまだ福祉風土が生まれているとはいえ、行政が何か作ると反対運動もあるので、民間組織がこのようなものを作り、受け入れてもらうことはとても大切だと思います。





第5分科会総括

社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会地域福祉部長 小澤 弘美

第5分科会ですが私、世田谷区社会福祉協議会の小澤と世田谷区ボランティアセンターの 植田さんで助言者と司会をいたしました。

テーマは「地域で支える/ボランティア」で7団体の方のお話を聞くことができました。 大きく分けて特別養護老人ホームでのボランティアの取り組みがあります。いままで特別 養護老人ホームといいますと、補助的なボランティアさんのイメージが強いのですが、実は 主体的な取組をなさるボランティアさんを入れて、その中で新しい取り組みをして施設内に 新しい風を吹かせる、施設の入所者の方々との関わり合いを新たに作り上げるといった取組 みをしております。そういう方の一番大変な事は、新たな人材の開拓と、開拓された人が継 続性を持たせた活動をすることが必要になってくる、ということがポイントなのかなという 気がしました。それに向けて、施設の中ではそういう方をコーディネートする役割を持った 職員さんが、専門的な支援を行っています。専門的な支援を行うにあたって、相乗効果があ り、その取り組みを見ることによって他の職員さんが理解を示すんですね。そういった中で 組織として全体でボランティアさんを受け入れる、そういう体制が整っているという報告が ありました。

また、ボランティアをする側のほうですが、施設でボランティアをすることを考えていらっしゃっているのですが、実はボランティアさん同士、入所者さんとのコミュニケーション、新たな連携、絆ができて、たとえば外に出てボランティアさんたちが知っている地域に出ましょうということで外に出る、外に出ることで施設の方が外の世界を見る、外の人たちと知り合う機会、そういったいい意味での相乗効果が生まれていることが分かりました。

そのほかの5つの発表ですが、セラピードッグカフェと言って犬を介して、地域で命の大切さを皆さんで共有しながら、地域の支援を、いろいろあるんですが、例えばワンワンボランティアと言って地域の見守り活動をするとか、あとは犬の命の大切さを通して生命の大切さを教えるといった活動をされています。

また、学生さんのから国際支援という形で、学生という立場から国際的な支援活動を行っている、また地域でのいきいきふれあいサロンといった地域の住民の方が主体となって、これまである町会・自治体、日赤、民生委員という立場の方が主体となった取り組み、自分たちの地域の特性を生かしてボランティアとしてやるといった様々な取組が発表されました。

これらの取り組みですが、生活の地域であるということが大きなポイントなのではないかと思います。地域でのボランティア活動ですが、逆に言うと地域の方にボランティア活動を知ってもらわなければいけない、、うことでなく、地域の方々たちに活動を知っているとでなら、地域の方々たちに活動を知っていると感じました。今まで地域でのボランティア活動についてはコミュニティという話しがずっとというははネットワークということをより強固にやっていかなければならないという印象を受けました。



第6分科会 学びあい、人材育成

進行役・助言者 : 山田祐子(日本大学文理学部社会学科准教授)

和田敏子(社会福祉法人世田谷ボランティア協会福祉事業部長)

	発表者	所属	テーマ
1	佐々木 哉江	世田谷区社会福祉事業団世田谷区立パルメゾン上北沢	あの「すぐ辞めた若者」が実習生だった頃 ~働くイメージが持てる実習を目指して~
2	荒木 めぐみ	薬局成城ファーマシー祖師谷店	見てさわれる在宅医療の研修
3	後藤 恵美	奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家	トレーニングパートナーの人財共育報告 ~"桜梅桃李"それぞれの花をたくさん咲かせよう~
4	山本 史織	昭和女子大学福祉社会学科	学生ボランティアの活性化方策に関する研究-昭和女子大学学生ボランティアコーディネーターの課題-
5	山田 宜廣 鈴木 サカエ 船橋 昭夫 平野 タカ子 金子 利治	生涯大学(世田谷区社会福祉協議会)	33 期福祉学習・体験・利用コース(2年間)の出会いと 学生体験の共有
6	宮川 英子	世田谷介護サービスネットワーク 訪問介護連絡会	せたがや訪問介護連絡会の設立と活動について

あの「すぐ辞めた若者」が実習生だった頃 ~働くイメージが持てる実習を目指して~

世田谷区立パルメゾン上北沢 佐々木 哉江

1、はじめに

どの施設や事業所にも、語り草になっている「すぐ辞めた若者」は居ませんか。 「3か月で辞めた」「1週間」「初日の昼休みに外出して、そのまま戻ってこなかった」 そんな「すぐ辞めた若者」にも、精一杯日々の課題に取り組んでいた頃があります。

2、数字から見る現状

- ・「若年者の離職理由と職場定着に関する調査」労働政策研究・研修機構 平成19年卒業後3年で中卒7割、高卒5割、大卒3割が離職している
- ・母子生活支援施設職員の平均勤続年数
- ・理想と現実の狭間 児童福祉系の学科を持つ大学・短大・専門学校は多い 「児童と接する仕事をしたい」という夢を持つ若い人は多いはず

3、実習は学校と現場のかけ橋

- ・生活保護のことは公的扶助、民生委員のことは地域福祉、愛の手帳のことは 障害者福祉で習う。「児童福祉施設で働くために児童福祉を勉強する」だけでは、 現場で起きていることを理解しきれない。
- ・学校で習った各科目が現場でどのように生かされているのか実感できると、「働く」ということに自信が持てるのではないか。
- 4、実際にパルメゾン上北沢で行われている実習プログラム
 - ・社会福祉士実習プログラム ソーシャルワークに重点を置く 最終日までに事例検討の演習を完成させる
 - ・保育士実習プログラム より直接的な児童との関わり方に重点を置く 最終日までに10分間プログラムを完成させる

5、おわりに ~働くイメージが持てる実習を目指して~

- ・実習生の反応
- ・職員が実習生から学んだこと
- ・「現場は大変だ。だから、きちんと勉強しておこう」 学校の勉強の大切さを再確認する機会になって欲しい

- <助言者からのコメント>

プログラムは、抽象的でなく、目標を立てると良いと思います。 実習の効果を検証して、発信してほしい。



見てさわれる在宅医療の研修

発表者 薬局成城ファーマシー祖師谷店 荒木めぐみ 共同研究者 ほっとケア 石井ひろみ

ぽんてっくす

橋元晶子

薬局成城ファーマシー祖師谷店

橋本孝子

丸山節子

トラストガーデン用賀の杜

田島明美

私たちグループは地域の医療系ケアマネジャーと薬剤師、地域の有志が主となり集まった自主的な研修グループです。

ケアマネジャーの基礎資格は様々ですが現在は福祉系のケアマネジャーが約8割を しめています。地域のケアマネジャーでも医療依存度の高い利用者に苦手意識をもつ ことが多く、医療系のケアマネジャーに依頼が集中することがあります。

砧地域では医療と福祉の連携を目指して1昨年より地域包括支援センターを中心として交流会や勉強会が行われていました。その中でケアマネジャーの医療に対する知識不足が問題視され、スキルアップする必要があるとの声が上がりました。

私達自主研修グループは、昨年度「財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団」の助成を受け、最期まで医療ニーズが高くても住み慣れた地域で安心して介護や医療が受けられる地域づくりを目指して、地域全体で利用者を支えていけるようなケアマネジャーのネットワーク作りや、ケアプランの質の向上を目標として全6回の研修を開催しました。

研修内容としては、胃ろう・インシュリン注射・床ずれの処置・緩和ケアの麻薬の知識・口腔ケアについて学ぶだけでなく、見てふれてもらい、まずはどんなものかを知ってもらう事から始めました。そして利用者や家族が行なっている医療行為をより身近に感じ、生活の中に医療がある事を考え、得た知識からケアプランに反映できるような内容としました。

昨年のせたがや福祉区民学会では胃ろうの勉強会の様子を発表させていただきました。今回はその後行われた研修の様子とアンケートからみえてくるもの、今後の研修のありかたなどを考察し報告します。

<質疑応答>

- Q1 医療系ケアマネジャーはどこまでを言うのですか?
- A1 看護師、医師、歯科医師、薬剤師、栄養士、理学療法士等です。
- Q2 フォローの実態とはどのようなものですか?
- A 2 在宅の場合は居宅療養管理指導が保険算定(介護保険・医療保険)できます。 在宅を訪問し、服薬支援、副作用の有無などを確認しています。まだまだ実 施している薬局は少ないのでもっとこれから浸透させていきたいです。



トレーニングパートナーの人財共育報告 ~ "桜梅桃李 "それぞれの花をたくさん咲かせよう~

発 表 者:特別養護老人ホーム等々力の家 介護課 後藤恵美 共同研究者:特別養護老人ホーム等々力の家 介護課 職員一同

【概要】

- ・等々力の家勤務の職員の状況、教育担当者(トレーニングパートナー)が配置された経緯。
- ・実際に行っている業務内容。
- ・約1年間行ってきてみえてきた職員の現状の報告。

【内容】

- ・介護職員としての職員の状況
- ・トレーニングパートナー配置の経緯とクレド
- ・トレーニングパートナーの業務内容と見えてきた現状
- ・社会における人材と等々力の家から誕生した男性版シンデレラストーリー

以上

- <質疑応答>

- Q1 新人さんがベテランさんになったときの対応はどうしていますか?
- A1 我流になりつつあるが、チェックシートを活用しています。段階を踏んで指導しています。



学生ボランティアの活性化方策に関する研究 -昭和女子大学学生ボランティアコーディネーターの課題-

昭和女子大学福祉社会学科地域福祉ゼミ 4年 山本 史織

1. 研究の動機と問題意識

私は昭和女子大学にはこれに付属する「コミュニティサービスラーニングセンター」があり、そこで「学生ボランティアコーディネーター」としての活動に参加している。本学では学生ボランティアが増加してはいるが、まだ多くの学生が参加したいと思いながら何らかの理由で実際には一歩足が出ない状況におかれている。

こうした実態をふまえ、コミュニティサービスラーニングセンターをより積極的 に活用して学生のボランティア活動が活発化するよう、学生ボランティアコーディ ネーターに課題について明らかにしたい。

2. 研究方法

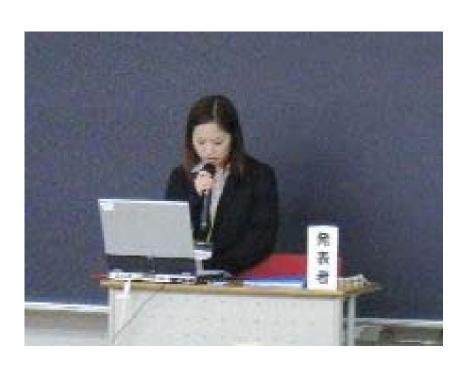
研究の主たる方法は、本学学生に対するボランティア意識に関するアンケート調査を行い、この結果をふまえてさらに第二次調査として、学生ボランティアコーディネーターに対するアンケート調査を実施する。この二つの調査結果分析し、課題を導き出す。

3. 調査結果の概要(別紙)

4. 結論

<質疑応答>

- Q1 大学入学前のボランティア活動体験者が72%、入学後は18%と著しく低下しています。ボランティアが嫌なのかと思うと大学入学後参加したいと思っている人は75%と高い数字です。この点をどう思っていますか?
- A1 大学入学後の不参加の理由は、資格関係の授業が結構多いということと、生活費を稼ぐのに必要なアルバイトがネックだと思います。自分自身もボランティアよりアルバイトを優先する部分があります。しかし、長い時間を使わなくとも簡単にできるボランティアがいろいろあります。たとえばエコキャップ集めで、この手の活動の品ぞろえを増やし、広く学生に理解してもらえば、75%の学生のかなりの要望に応えることができると思います。こうした取り組みは、学生ボランティア・コーディネーターの大きな課題だと考えています。



33 期福祉学習・体験・利用コース(2年間)の出会いと学生体験の共有

世田谷区生涯大学 33 期福祉学習・体験・利用コース 専任講師 山田宜廣 共同発表者 33 期生 鈴木サカエ 船橋昭夫 平野タカ子 金子利治

1.33 期コースの目的

専任講師として福祉学習・体験・利用と名付けた理由は、福祉を知るには、福祉と は何かを理解する、福祉現場をみる、福祉を利用するにはどのような手続きが必要か ということがわかる、それには学習と体験を重ねることが大切だという思いからです。

世田谷区で2年間同じ生徒さんたちと学ぶわけですから、世田谷区の福祉事情、その状況を知る、各種の福祉施設を知ることを主眼としました。それとともに生徒さん達が住んでいるその地区の福祉を知るということも大切にしました。これは福祉に係る、福祉に参加するということを考えたことによります。このコースから得ていただきたいものは、"出会い""張り合い""学びあい"ということです。

2. 授業内容(カリキュラムの詳細は当日資料で確認ください)

1年時授業-福祉を学ぶ、世田谷区の福祉施策を学ぶ、世田谷区の社会福祉協議会を学ぶ、高齢者の生き方を学ぶ、施設の見学・体験などです。

2年時授業-ボランティア活動に係る、障害者を理解する(コミュニケーション)介護・看護の体験・利用(病院、施設、在宅)、福祉時事を取り上げるなどです。

3. 結果(2年間の授業成果)

1年時アンケートは、印象に残った外部講師、印象に残った施設など、1年間おわっての感想、感慨、2年目への期待・抱負について書いていただきました。

作品集-2年時に卒業作品として一人 2000 字の作文を生徒さんが書いたものを記念作品集としてまとめます。今回発表をお願いした方々は、この記念作品集に授業を受けてどういう感想を持ったかを書いた方々の中から選んだ人たちです。当日は4人の共同発表者が発表します。

4. 考察

2年間の授業はこの時点ではまだすべて修了していませんが、授業の目的は理解していただけたのではないかと思います。それはアンケートや作品集からの得た感触です。特に大きかったのは、世田谷区、世田谷区社会福祉協議会の施策や取り組みについて、みなさんに強い関心がうまれたことです。さらに施設の見学・体験ではみなさんの新鮮な体験の声に、驚くことがたくさんありました。現場の方から説明を受ける、直接現場を見聞するということが福祉の理解にとっていかに大切なことかみなさんから教えていただきました。

5. 課題

カリキュラムは試行錯誤の連続でした。みなさんと話し合いながらの模索となりました。福祉の学習と体験をみなさんとどう共有するかはとても大きな課題です。

- <質疑応答>

- Q1 改めて思ったことはどのようなことですか?
- A1 介護の大切さ、苦労を身近に感じられるようになりました。人の輪の大切さ。 自分でできることはまだまだあると気づかされました。高齢者福祉は通らな ければならない道。
- Q2 学びをどう活動に展開していきますか?構想等はありますか?
- A2 求められることがあれば何でも。とにかく何かスタートしたいです。
- Q3 学んだことから学生にメッセージを。
- A3 すぐボランティアではなくていいので、まず見学から始めてみてください。 若者のボランティアは幅が広いので頼りにしています。心強いし、ありがたい。 福祉に関心を持ってもらいたいです。



せたがや訪問介護連絡会の設立と活動について

介護サービスネットワーク訪問介護連絡会代表 宮川英子

在宅介護サービスの要ともいえる訪問介護事業所は、その多くが中小規模です。このため、従事者が確かな介護知識と技術を身につけ質の高いサービスを提供するためには、事業者が協力し合うことが必要です。

せたがや訪問介護連絡会は、世田谷区介護サービスネットワークに加盟する事業所の有志が発起人となり、今年1月に発足しました。訪問介護事業に共通する課題に協働して取り組み、訪問介護サービスの質の向上を目指しています。

本会では、世田谷区の5地域から幹事を選出し、毎月1回幹事会を開催しています。 また、年4回の定例会を開催して課題に取り組むこととしています。

訪問介護の具体的な課題には、①ケアマネジャーや医療機関などとの連携、②介護保険でできるサービスかどうかなど自治体ごとに制度解釈が違う問題(グレーゾーン問題)に関して世田谷区の情報を共有する、③介護に関する技術、知識の向上、④書式が決められていない訪問介護計画書など、世田谷区内の書式の共通化、⑤制度改正等に関して職能団体として意見を表明することなどがあります。

平成 22 年度の活動

①第1回定例会

4月27日に「ケアマネさんと連携しよう」と題して、検討課題別にグループワークを行いました。検討した課題は、散歩介助、同居家族がいる場合の生活援助、医療行為、その他でした。ケアマネッツなどのケアマネジャーに協力いただき、連携方法について検討しました。

②第2回定例会

7月15日に「リスクマネジメント」をテーマに東京都社会福祉協議会の須永誠氏を講師にお呼びして開催しました。苦情への対応の方法、問題の捉え方、苦情を活かすことでサービスの質を向上できること、サービス提供責任者の役割などについて学びました。

③第3回定例会

10月19日に「明日からつかえる訪問介護のシートを作ろう」と題して共通書式の検討を行いました。訪問介護計画書、アセスメントシート、ケアマネ報告書、モニタリング、サービス依頼書について世田谷区の共通書式をグループで検討しました。

④第4回定例会

来年1月に課題検討を行う予定です。

訪問介護連絡会の今後の課題

- ◆ 世田谷スタンダード(書式)をホームページに掲載する。
- ◆ グレーゾーン問題について世田谷のQ&Aを作成してホームページに掲載する。
- ◆ 介護と医療の連携のため会員訪問介護事業所のレベルアップを図る。
- ◆ 現場からの声を反映した活動を企画・運営する。
- ◆ 世田谷区の訪問介護サービスの質を底上げする。

- <質疑応答>

- Q1 マップの活用とはどのようなことですか?
- A1 地域に分かれて大きなマップを作成しています。それにマニュアルを添えて 各事業所に配っています。
- Q2 入っていない事業所に対してはどのようにPRしていますか?
- A2 3ヵ月に1度介護ニュースと一緒にお便りを会員でない人にも送っています。芸能人とのイベントなどでも盛り上げて会員を増やしていきたいです。 今後も課題として引き続き検討し、取り組んでいきます。



第6分科会総括

社会福祉法人世田谷ボランティア協会福祉事業部長 和田 敏子

第6分科会は「学びあい、人材育成」というテーマで進められました。司会進行役はで日 大社会福祉コースの山田さんとボランティア協会の和田が進めさせていただきました。

発表は6題ありました。全部、学びあい、研修ということがテーマでしたが、偶然でしょうか若い方々、学生さんの実習から始まって、生涯学習まで、年齢が異なり、高齢になっても学びということが継続されていく報告でした。

振り返りますと福祉施設の実習生を受け入れるのにあたって、福祉施設の方が新人の離職率が高い、この離職率が高いというのを様々な要素を考え離職を避けるために、まず実習生からきちんと取り組もうという新たな実践をされておられました。

2番目の成城ファーマシー祖師谷店では連携を組んで、在宅医療についての研修を広く進められました。ただ研修を進めただけでなく、地域にどんどん輪が広がって宅配のお弁当の方たちもこの研修の輪に入れるくらいの地域の広がり、勉強の広がりが見られる報告でした。

3番目の方は「等々力の家」で行われている新人職員の研修でした。単なる研修でなくて、研修生さん、どんどんその新人職員が学びを深めて、ついにはその職員の方が他区の方にも研修に参加されるというエネルギーをもった報告でした。

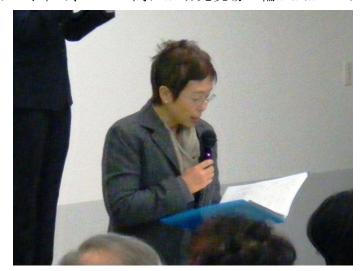
ほかには昭和女子大のボランティアを支えているコーディネーターの方の発表でした。今の時代はボランティアをする学生さんがほとんどおらず、昭和女子大でも現在、大学でボランティアをする方のアンケートをしたところ、学生さんの17%でした。この17%をいかに増やしていくかということが研究の報告としてあげられました。

5番目は「生涯大学」という事で、人生の後半で改めて皆と競って学びをすることで得た 学びについてのご報告がありました。

6番目が訪問介護についてのネットワークを広げる中、今後の3年後の制度見直しについてぜひ連携を深めたいというご発表でした。

どの報告も研究、研修、または人材育成ということがテーマでしたが、共通していることは一つです。研修や研究をどんどん深めていく中で、いつの間にか研究現場の輪が広がって

世田谷区を超え、外の人たちと繋がっているということ。それが専門家だけではなく、市民や宅配のお弁当の業者の方まで輪が広がっているということ。研修をすると、改めて学びに(研修、実習等)真剣に向かうことで、輪が広がり人とのつながりが深まっていくということを、皆さん確信されていることを深く感じました。



第7分科会 福祉環境

進行役・助言者 : 加藤美枝(世田谷区生涯大学専任講師)

長尾譲治(駒澤大学文学部社会学科准教授)

	発表者	所属	テーマ
1	簑田 日登美 澁谷 和子	NPO 法人世田谷福祉住環境コーディ ネーター研究会	「介護保険の住宅改修」の現状と問題点 一世田谷区介護保険住宅改修の事前訪問調査分析結 果からの考察-
2	稲垣 敦子	日本大学文理学部 心理学科社会福祉コース	実習中に見てきた福祉環境 〜福祉機器の歴史〜
3	丸山 龍太	駒澤大学大学院	わが国におけるセーフティネット機能の脆弱性
4	渡部 洋子 坂本 啓之	世田谷区役所世田谷保健所感染症対策課	高齢者施設で結核患者が発生してもあわてないために 〜世田谷区では年間71人の後期高齢者が結核を発 病しています〜
5	能 俊彦 柿崎 八重子	生涯大学(世田谷区社会福祉協議会)	「消えた老人」問題について 〜社会全体の絆であんしんな社会を〜
6	赤城 愛美 龍尾 怜子 戸谷 治佳 古川 悠一	日本大学文理学部 心理学科、社会学科 社会福祉コース	浅草バリアフリー実態調査 - 車椅子体験を通して分かった見えるバリアと見えないバリア-
7	三井 美穂子	NPO日本トラベルヘルパー協会	高齢者への外出支援サービスの必要性について 〜温泉リハビリ外出支援バス事業を通じて〜

「介護保険の住宅改修」の現状と問題点 —世田谷区介護保険住宅改修の事前訪問調査分析結果からの考察—

N P O 法人世田谷福祉住環境コーディネーター研究会 介護保険住宅改修事前訪問調査分析 グループ 簑田日登美 澁谷和子

当世田谷福祉住環境コーディネーター研究会(通称せたふく)は、高齢者や障がい者の住環境整備について研究・実践している NPO 法人です。福祉住環境コーディネーターが中心となり、世田谷区などで住宅改修の相談業務や調査などにもかかわっています。高齢者、障がい者が暮らし慣れた地域で安心して住み続けるためには、その住まいが居住者の生活や身体などの変化に適切に対応できるものでなければいけません。その実現のために NPO 法人世田谷福祉住環境コーディネーター研究会は日々活動しています。

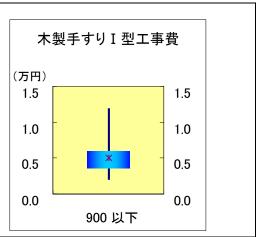
当 NPO 法人は、2009 年度より世田谷区から「介護保険住宅改修事前訪問調査」を委託されています。住宅改修が要介護者・要支援者の状態に適したものであるかどうかを、個々の利用者の身体状況の聞き取りや家屋状態から確認し、同時に見積書・図面・理由書の内容についても精査を行います。特に工事金額の妥当性については、判断が難しく迷うことが多くありました。その対策として、2009 年度の調査内容を分析し工事金額の目安となるような指標を作りたいと考え、まず改修の約 70%を占める手すりの工事費を分析しました。この指標は、今後の事前調査に活きてくるものになるはずです。また分析結果は、介護保険の住宅改修を考える利用者の工事金額の目安になるのではないかと考えました。今回はその結果を発表します(下記の枠内参照)。

<結果より一部抜粋>

木製手すりの I 型・長さが 900 ミリ以下(補強板が不要の場合) 1箇所当たりの工事費について

- · 最小値 2.000円
- · 最大値 12,000円
- · 平均值 5,000円
- ・ 25~75%値 3,475~6,000円

※他工事との併用により金額の変動があると思われる



今回の住宅改修事前訪問調査の分析結果から見えてきた介護保険の住宅改修の問題点や困難点についてもお話したいと思います。そのことから今後の住宅改修の進むべき方向性が見えてくるのではないかと考えています。この報告が今後の介護保険の住宅改修を考える上での参考になれば幸いです。

<質疑応答>

- Q1 手すりはL型やI型など様々な種類があるが、一番安いものと高いもので金額に差がでるのはなぜですか?
- A1 取り付ける場所、本数、下地(補強板あり、無し)など住環境が異なり、また業者によって施工費にばらつきがあるためです。
- Q2 施工金額にばらつきがあるが、施工者はどのように決めているのか?その際、どの様なアドバイスをしているのですか?
- A 2 自分たちでは決められません。区の方から見積書が回ってきます。区や利用者は、ケアマネジャーの勧めや、以前利用したことのある施工業者を選んでいるようです。自分たちで施工業者を決められないのでアドバイスはしていないが、今回の分析によって今後、標準金額や平均金額を出し、示すようにしていきたいです。



実習中に見てきた福祉環境 ~福祉機器の歴史~

日本大学文理学部心理学科社会福祉コース:稲垣 敦子

目的

今年の九月に障害者施設で実習をしました。その施設は創設約30年で、福祉機器や施設内の構造が古いものでした。古いものを見るのは初めてでとても興味深く、暇な時間さえあれば施設内を観察していました。観察をしていくうちに、今の機器は昔の機器があってこそ生まれたものであり、よりよい環境を生みだすためには今だけではなくその過程も大事だと思います。それ故、昔から最新の機器へと発展していく過程・歴史を見ていくことによってその変化や施設を建設した方達の配慮(想いやり)を感じ取り、それを"よりよい環境"作り(又は専攻:私は周りの環境によってヒトがどのような影響を受けるのか、どのような環境が快適で不快と感じるのか等を研究する環境心理学を専攻しています。)に活かせたらと思い研究題材にしました。

内容·結果

- 1. 実習施設の説明
- 2. 施設内の機器の説明
 - 福祉機器の歴史や詳細説明
 - ・機器についての職員からの意見
- 3. 国際福祉機器展での新しい機器と実習先施設の機器との比較

考察

実習した施設内の構造は、その時代の建築家達が障害者の安全を考慮し建てたものが今も残っています。しかし、今の時代にそぐわない機器、作りがあるのも事実です。そこで自分なりに、施設にどのような機器を取り入れたら良いのかを考えました。

課題

国際福祉機器展へ行って驚いたことがありました。それは宇宙開発機構のJAXAが介護の領域へと進出していることです。宇宙空間での滞在と介護の寝たきりの方にかかる負荷が同じ(筋肉・骨の廃用性委縮)だという共通点があり、宇宙で使用しているものが介護へと、介護で使用しているものが宇宙で使われる相互の時代となったのです。なので、次回は宇宙環境から見るベッドレスト防止法を見出していきたいと思っています。

< < 質疑応答 >

- Q1 専攻研究はなんですか?
- A1 環境心理学です。主にバリアフリー、ユニバーサルデザイン、環境(自然、人混み、住居等)が人に対し与える影響とそのストレスに対する解消法です。
- Q2 宇宙の閉鎖的環境が人間の心理にどのような影響を与えるのですか?
- A2 宇宙は地上と違い特殊な環境下にあります。宇宙滞在中、常に放射線被爆や命の危険に曝されています。そしてスペースシャトルや国際宇宙ステーション内の狭い空間において多国籍のメンバーで何十、何百日も暮らさなくてはいけません。故に滞在期間が長期になればなるほどストレスの影響はどんな人にも現れます。旧ソ連では宇宙滞在30日をすぎた頃からクルーがお互いに敵意を見せ始め口論になった事例があります。また、うつ病や無気力、情緒不安定、不眠症状が表出し人間関係に悪影響を及ぼしたり、病気になってしまったら適切な治療をうけることが出来ない故に疾病への恐怖が生じることがあります。

そのため、フライト前にはストレス、問題対処のための訓練を積み、一緒に搭乗するクルーが決定するとその構成員で登山や雪山歩きなどのサバイバル訓練等を行います。また、フライト中の精神面の対策として、フライトサージャン(航空および宇宙医学の知識を持ち、パイロットや宇宙飛行士の健康管理、航空宇宙医学の研究を行う専門医)による地上からのモニタリングとコミュニケーション、カウンセリングが行われます。精神分析のような積極的な物ではなく、勇気付けなどを中心とした支持療法が中心です。

しかし、宇宙飛行士は前提条件として"ストレスに強く精神病の兆候が見られない"方を選任します。強靭な体力、知力、精神力が求められるのです。なので何の訓練も受けていない一般の方が宇宙へ行った場合どういった症状が出るのかはまだはっきりしていません。

民間の宇宙開発事業がこれから始まっていく中で、それらがこれからの課題になっていくのではないでしょうか。



わが国におけるセーフティネット機能の脆弱性

駒澤大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士後期課程:丸山 龍太

わが国の相対的貧困率、2007年時 15.7%、子どもの貧困率 14.2%(厚生労働省発表 2009, 10月)、ひとり親世帯の貧困率 58.7%(厚生労働省発表 2009, 11月)、高齢者の貧困率 22.8%、勤労世帯の貧困率 12.3%(OECD2008, Growing Unequal)。このように、わが国の貧困の拡大は特定の年齢層に関わらず、全年齢層に広がりを見せている。国民の 7人に 1人が貧困であることが公式に明らかとなった今、社会保障制度が果たすべき役割はこれまで以上に大きくなっていると言える。

ところが、社会保障制度の根幹である生活保護制度に負担が集中する現象が起こっている。被保護実人員の伸び、それ自体は捕捉率を高めるという意味では歓迎できるものである。しかし、逆を言えば生活保護受給に至るまでその他の社会保障制度では捕捉されずに落層を続けた可能性も指摘できるということでもある。生活保護は周知のとおり「ラストセーフティネット」である。ラストに捕捉される人の急激な増加は、裏を返せばその前に機能すべき社会保障制度が機能不全しているものと考えられるのである。

そこで本研究では、次のような仮説を立て、現状の社会保障制度へのアプローチを 試みた。

仮説:現状の社会保障制度は、結果として人々を排除する構図となっている。最終的に生活保護制度が全てを捕捉せざるを得ない状況である。

現状の社会保障制度では生活上の事故に遭遇すると、段階を経ずに一気に落層することが問題として挙がっている。湯浅誠氏はわが国を「すべり台社会」と述べているが、湯浅氏が提唱された頃は 2008 年であり、今日ではより悪化していると考えられる。社会保障制度で捕捉されなかった者が行き着く第 4 のセーフティネットは刑務所であるという指摘も見られる。以上のような問題意識を軸にして社会保障制度のセーフティネットの脆弱性に関する現状にアプローチを試みる。

<質疑応答>

- Q1 生活保護基準未満の15.7%しか生活保護を受給していないが、この基準 に資産は含まれていないのでしょうか?
- A1 この基準に資産は含まれていません。収入のみです。
- Q2 日本では受給する前にミーンズテストが行われるが、欧米ではどうですか?
- A 2 日本ではミーンズテストを行うことで受給の入口が狭いが、欧米では多少の 資産があっても受給可能です。
- Q3 「複合的なセーフティーネット」とは、具体的に言うとどのようなことですか?
- A3 今までは収入に対する支援のみであり、給付して終了でした。しかし、今後は多面的な支援が必要です。例えば、身動きの取れない人に対し、現金を渡すだけでいいのだろうか?"生活"は現金だけでなく、社会とのつながりも大切です。ナショナルミニマム研究会の今後の活動に注目したいです。



高齢者施設で結核患者が発生してもあわてないために ~世田谷区では年間71人の後期高齢者が結核を発病しています~

発表者 世田谷保健所感染症対策課 渡部洋子 坂本啓之 共同研究者 世田谷保健所感染症対策課 松木浩一 猪 綾子 山口悦子

【背景】

60年ほど前、結核は不治の病であり日本人の死因の1位でしたが、現在は治療も確立され、確実に服薬すれば治る病気となりました。また、早期に診断されれば通院治療も可能となり、年に1回の定期健診の重要性が言われてきました。

しかし、未だに結核への偏見は根強く、結核患者が発生すると家族や高齢者施設など周囲の方が過度な心配を抱くような状況もあります。また、高齢化の進展とともに、若い頃に結核に感染していた利用者が加齢や寝たきりによる免疫低下が進んだために発病するケースも増加しています。

世田谷区では、平成21年に184人が結核を発病し、そのうち65歳以上の高齢者は96人(52%)と半数を占めています。また、75歳以上の後期高齢者は71人(39%)となっています。

世田谷保健所感染症対策課では、区内の高齢者の結核患者の療養支援や感染拡大防 止の実際を報告し、高齢者施設等の関係機関と今後の相談や連携の強化を図りたいと 思っています。

【内容】

- ・ 結核患者の発生から保健所の関わりについて
- ・ 世田谷区の結核統計
- 高齢者の結核
- ・ 接触者調査と接触者健診
- その他



- <質疑応答>

- Q1 結核に感染したらどのように対処したらいいですか?消毒などはした方がいいのでしょうか?
- A1 結核患者が使用していた食器や衣類を消毒する必要はありません。結核菌は 紫外線に弱いので、太陽に当てる(日光消毒)すれば大丈夫です。また、し っかり換気することも大切です。
- Q2 結核の発症率は患者の生活形態(独居・ADL)と関係していますか?
- A 2 わかりません。ただし、結核は抵抗力や免疫力が低下していると感染、発症 しやすくなります。



「消えた老人問題」について ~社会全体の絆であんしんな社会を~

発表者:世田谷区生涯大学第34期福祉文化コース 能 俊彦・柿崎 八重子 共同研究者:岩永 英雄・大野 良子・ほか同クラスー同

平成22年7月末に発見された東京・足立区の111歳老人遺体不明事件は社会に大きな衝撃を与えた。

- 1. (海外での反響など) 韓国ソウルのマスコミは「長寿大国の虚構」と題し皮肉をこめて報じている。また直接関係はないが、ロンドンでは独身男性が10人の女性に福祉手当などを不正に受給させていたことが大きく報じられている。
- 2. (研究テーマに) 当クラスでもグループでの研究テーマの一つとして取り上げ検討を進めている。その後 NHK ではシリーズ「無縁社会」として取り上げ放映、また9月の老人週間を挟んで新聞各紙・総合雑誌などが多数取り上げている。
- 3. (世田谷区生涯大学) 1977 年に世田谷区老人大学として設立、30 周年を機会に現在の校名に改称。修了生約 4000 人、60 歳から入学可。週 1 回 2 年制、5 コース別学習ゼミと健康体育。学習した成果を活用してコミニュティ作りに参加することが期待されている。(学習の地域還元)
- 4. (都議会代表質問) この問題は都議会代表質問でも高齢者対策として世田谷区選出の三宅茂樹議員が取り上げている。「行政がすべて面倒を見るべきではなく、社会全体の絆を再生することを強調し、一人暮らしの高齢者に対する地域の見守りを推進する」こととむすんでいる。(別添都議会議事録 12 号)

これに対して石原慎太郎知事は「今日の日本は金銭が価値の第一になりいたずらに権利主張が横行し自分の属する地域社会への帰属意識、責任感が失われつつある。日本人がかって脈々と受け継いできたものを確かに伝えるべく、東京都としても多角的な取り組みを重ねて行きたい」とし「先般都内で露見した、30年前に亡くなった老父を弔いもせずにミイラ化し、その年金を詐取するという人間として下劣な物の考え方、生き方というのは、私は本当に日本の民族そのものが、堕落・衰弱してきたその一つの典型的な証憑と思います」と答えている。しかしこの問題の背景には急速に進みつつあるわが国の超高齢化があり生活保障や公助共助自助を含めた未成熟の福祉文化の側面を看過することはできない。

- 5. (全高齢者実態把握調査)世田谷区では昨年の7・8月に区内在住の65歳以上の高齢者15万人を対象に全国でも例のない全数調査を実施した。調査結果によると全体のうち一人暮らしは17.9%、高齢者のみの世帯は34.8%であった。高齢者の見守り訪問を「希望する」は10.4%に留まったが、「今後は希望するかもしれない」が66%もあり将来への不安を窺わせる。
- 6. (あんしん協力員) また杉並区では6年前から「たすけあいネットワーク」事業を立ち上げ、区の講習を受けて登録したボランティアの「あんしん協力員」550人が活動している。同様の制度は豊中市でも実施が決定している。
- 7. (今後の展望) 超高齢社会の進展に伴って問題はさらに深刻化している。それぞれの地域社会の実情にあったきめ細かい対策が求められる。その際行政の上から目線ではなく、地域の NPO 法人等が主体となって取り込むことが最も実効性があると思われる。区役所・町会との緊密な連携のもとに社会構造の変化に応じた施策を地道に粘り強く展開していくことが何よりも肝要である。

抽象的な議論でなく今こそ着実に具体策が求められている。

- <質疑応答>

- Q1 アパートやマンションに住んでいる高齢者にはどう対応するのですか?
- A1 国勢調査でも回答率が低いのがアパート・マンションの住人でした。なので、この人たちに対する調査を行います。また、パイロット地区を作ります。



浅草バリアフリー実態調査 - 車椅子体験を通して分かった見えるバリアと見えないバリアー

発表者:赤城愛美・龍尾怜子・戸谷治佳・古川悠一 共同研究者:池田卓馬・外村純一・二野佑允 日本大学文理学部社会福祉コース

1. 目的

私たちが生活している街にはバリアが多くあるのではないかと疑問を抱き、 車いす体験を通して普段気づかないバリアについて実態調査を行った。バリ アフリーの現状や問題点等の調査、その分析を通して高齢者や障害のある人 の権利を考えることを目的としている。

2. 実態調査概要

1)調査対象 :大学の最寄り駅から浅草駅までの公共交通機関(駅構内・

ホーム・車両内)と浅草の商店街等を調査場所とした。より複数駅を調査するため往路と帰路は別経路を使用した。

2) 調査期日 : 2009年10月3日(土)

3)調査方法 :標準型車いす2台を使用し、バリアフリー実態調査を実施

した。

3. 調査結果

往路は4駅でエレベーター6回、帰路は4駅でエレベーター5回、昇降機3回を使用した。浅草寺周辺ではエレベーター、スロープを使用し、徒歩で移動するよりも多くの時間がかかった。車いす用トイレは7駅中6駅にあり、訪れた飲食店2店は車いすのまま入店することが出来たが車いす用トイレは設置されていなかった。仲見世には車いすのまま入ることが出来ず、商品を自由に見ることや手に取ることが出来なかった。物理的なバリアフリーが整備されていた場所でも、実際に使用してみると不便なことが多く見受けられた。

4. 考察

実態調査後に体験から気付いたバリアを書き出し、KJ 法を用いて問題の明確化と解決方法を探った。バリアには「物理的バリア」、「制度的バリア」、「文化・情報のバリア」、「意識のバリア」の4つがあり、この4つのバリアについて考えていく中で、それぞれのバリアには時間的な制限が関わっていることに気付いた。これを私たちは「時間的バリア」と新たに定義した。車椅子を使用する人々の日常生活や余暇活動を保障するためには、これまで言われている4つのバリア以外にも時間的バリアを解決する視点からバリアフリーを検討することが重要だと考えた。そのためにも、もっと車いすを使用している人々の声を反映してバリアフリーを整備していく必要があると思う。

- <質疑応答>

- Q1 曜日によって浅草は込み具合が変わると思うが、その調査はどうでしたか?
- A1 土曜日だったので電車は空いていたが、浅草は混んでいました。
- Q2 「利用者主体」について、車いす利用者への調査は行いましたか?
- A 2 今回、利用者への調査は行っていない。今後、利用者の意見も聞き、 さらに自分たちの調査を加え、理解を深めていきたいです。
- Q3 日本文化とバリアフリーの共生についてどう思うか? (日本の歴史的 構造物は段差が多い)
- A3 浅草ではやはり段差が多かったです。日本文化とバリアフリーについては、今後考察を深めたいです。



高齢者への外出支援サービスの必要性について ~ 温泉リハビリ外出支援バス事業を通じて~

NPO日本トラベルヘルパー協会

「WAM助成事業『温泉リハビリ外出支援バス事業』運営委員!三井 美穂子

【目的】

高齢者の外出機会の確保は、健康に好影響をもたらし、介護予防・認知症予防につながると考えられる。しかし、外出支援は現行介護保険制度の対象サービスになっていないこともあり、日本の高齢者は、心身の健康を維持するために十分な外出機会が得られているとは言えない。

トラベルヘルパー(※)による外出支援により、外出を諦めていた高齢者を1人でも多く外出へ繋げるため、今年度独立行政法人福祉医療機構【WAM】の助成事業として『温泉リハビリ外出支援バス事業』が始まった。

これらより、サービスとしての外出支援の必要性について研究する。

※トラベルヘルパーとは、介護技術と旅行知識を備え、行動が不自由な人の外出支援など、高齢者のさまざまな課題解決に取り組む人材

【内容】

WAM助成『温泉リハビリ外出支援バス事業』では、アンケート調査と外出支援バス運行の社会実験を実施した。

- ・高齢者の外出機会が減少するのはどのような理由からか、また適切な頻度で外出機会を提供するためにはどのような条件整備が必要かを探るために「外出に関する意識調査」を実施。
- ・世田谷・杉並区内の高齢で行動に不自由のある人を対象として、以下の特徴を持つ「見守り介助サービス付温泉日帰りバス」を運行する。
 - ①出来る限りお客様のご自宅の近くまでお迎えする
 - ②道中ではトラベルヘルパーが健康講座やさまざまな笑いを届ける
 - ③少人数の貸切バスで運行する
 - ④バリアフリー施設でトラベルヘルパーの見守り・介助を付ける
 - ⑤健康づくりに役立つお土産を付ける

【結果】

アンケート調査は9月・10月で1768枚配布し約900枚を回収。10月21日には第1回「地域巡回温泉リハビリ外出支援バス」が運行した。この外出支援バス参加者は、その後個人手配のトラベルヘルパー付き介護旅行を申し込まれた。

【考 察】

今まで外出を諦めていた高齢者も、外出支援サービスを利用して外出することによって外出への自信を取り戻したのではないかと考えられる。だが外出支援サービスを知らない方にとっては、諦めた外出が諦めたままになってしまっている。そういった方の元に外出支援サービスの存在を周知すると共に、多様なケースに対応できる実践力のあるトラベルヘルパーの養成の必要を感じた。

< < 質疑応答 >

- Q1 旅先での事故が起きた場合の責任はどうなりますか?今まで事故は起きていませんか?
- A1 責任は、事故の起因によりますが、今までに大きな事故は起きていません。 また、旅行はお客様ご本人がご希望されていることはもちろん、ご家族及び 主治医(ケアマネージャー)などの許可を得て、介護旅行を行います。
- Q2 送り出すだけではなく、現地での受け入れ態勢を整えると安くなるのではないですか?
- A 2 その通りです。現地のみの介助・付き添いをご希望の方には現地のトラベル ヘルパーを派遣することにより、諸費用が安くなります。 現在、東伊豆では「着地型トラベルヘルパー」の養成が始っています。です が、トラベルヘルパーを利用するお客様は、全行程介助または付き添いが必 要な方が多いため、ご自宅からご自宅までをご一緒することが多いです。
- Q3 参加者の要支援·要介護度の平均はどれくらいですか?
- A3 地域巡回温泉リハビリ外出支援バスの対象が、「介助があれば、バスのステップが上れる」ことなので、要支援2程度が平均と考えられます。



第7分科会総括

駒澤大学文学部社会学科准教授 長尾 譲治

第7分科会のご報告をさせていただきます。第7分科会は「福祉環境」というテーマで、 世田谷生涯大学の加藤美枝先生と司会進行をさせて頂きました。

発表は7つでしたが、福祉住環境、セーフティネット、保健医療に関する環境、高齢者の 見守り、バリアフリー、高齢者のリハビリテーションなど、様々な内容のものがありました。

まず1つ目として、福祉住環境コーディネーターの方が、実際に行われた訪問事前調査の データを出されました。なかでも工事金額に関するデータをご説明いただきまして、いま高 齢者のリフォーム問題がかなり話題になっておりますけれど、今後、本データが指標化され ていくことが非常に期待される発表でした。

2番目は福祉住環境と宇宙開発という、非常に夢のあるテーマでの発表でした。学生さんが実習に行かれた施設の状況や、NASAなどで開発された製品が一般にも利用されてきているのと同様に、日本の高齢者分野にもJAXAが参入しつつあり、今後の役割が期待されるというお話でした。

3番目はセーフティネットとしての生活保護ということでしたが、経済状態が悪化してきている中で、生活保護の機能もますます低下してきております。こうした中で、いわゆるウェッブの「ナショナル・ミニマム」という原点に立ち戻らなければならないのではないかという発表でした。

4番目は結核に関する発表でした。ここ数年、ふたたび結核の問題が注目を集めていますが、とりわけ青年期に感染していた方が高齢になって再発したりすることがあるようで、情報の共有のあり方などについてのご提案を頂きました。

5番目は消えた高齢者問題という、全国を賑わせた話題でした。世田谷区生涯大学からの発表で、世田谷区も他人事ではなく、今後行政と企業などが連携して行かなければいけないという発言がございました。

6番目は学生さんによる浅草のバリアフリー実態調査についての発表でした。実際に車いすを使って浅草まで出かけて行った体験からの考察でした。「時間的バリア」という新たな概念についての指摘があり、大変興味深い発表でした。

最後の7番目は、温泉リハビリテーションに関する発表でした。今後ますますニーズが高

まると思われるトラベルヘルパーについて の興味深い内容でした。また利用者のニーズ が実際にどうなっているのか、外出先でのト ラブルにどう対応するのか、という点につい ての質疑応答もありました。

住環境というのは、福祉分野の新たな視点です。それは家屋の住環境に限らず、地域に住んで見守る、外出する、そして健康や命を守るというふうに様々な視点から住環境を捉える事が必要だと改めて考えさせられた分科会でした。



全体総括



全体総括

日本大学文理学部社会学科准教授 上之園 佳子

本日は晴天にも恵まれ、せたがや福祉区民学会第2回大会が盛況におこなわれましたことは、ひとえにご参加頂きました皆さまのおかげだと感謝いたします。本当に有り難うございました。

開催校として学会の開催にあたり準備等いたらないこともございましたでしょうが、日本大学文理学部の新校舎3号館の5階というワンフロアの空間を使用して開催できたことは、分科会場の移動でもこの寒さを凌ぐことができましたし、良かったのではないかと思っております。12月なので今はもうすっかり日が落ちてしまいましたが、空も青く夕日もきれいでした。5階から窓を眺める余裕がございましたでしょうか。

本日の大会は田中荘司先生の基調講演から始まり、先程ご報告がございましたように7つの分科会では多彩な実践活動が昨年よりも多く47の実践活動報告と活発な議論がおこなわれました。参加者の方もまだ最終的な数字は出ておりませんが300人を超えていると伺っております。

今年度より学会本来の趣旨である世田谷区の区民と地域の福祉実践者、大学とが協働した学会となり、主体的な学会活動へ向けてあらたな歩みを始めた大会となりました。その一つとして学会費や学会参加費など将来へ継続していく学会体制をめざしているとのことです。参加費が今年から500円という事で参加人数を心配しておりましたが、多くの方々が参加され、各分科会の総括ではこの学会のテーマでもある「学びあい ひろげよう せたがや福祉の輪」に相応しい発表でございました。さらに、日々の実践、あるいはそれらの活動をより科学的、あるいは研究として取り込むことで現場や地域、様々な活動がより進化していく、そして福祉自体から様々な所に発信していくという活動の基盤となった学会大会だったのではないかと思います。そういう意味では大変充実した学会の報告だったと思っております。そこで、二つほどこれからの学会活動に期待するものとして、本日の学会大会の開催校の総括として感じた事をお話しさせて頂きたいと存じます。

ひとつは、この世田谷という地域での学会活動の特性を活かし、学会の活動が大会だけでなく、むしろ大会の分科会での意見交流などをきっかけとして定例化した研究会、勉強会が開催されることを願っております。昨年の大会から施設を超えて介護職員の自主的な学習会などができたと伺っております。

したがって、年1回の学会大会、これも是非ますます充実させていただきたいのですが、 せっかく世田谷区の地域、身近な地域での福祉に関する研究や発表をする活動ですから、な にか年間を通して継続的なものが始められるとよいなと思っております。そういう意味で教 育や研究の機関である大学を活用していただくということを今後考えていただければと思 います。そのような、活動が学会員や大学などと世代を超えて交流する場として地域の連携 を推進していくものとなることを望んでおります。 二つ目は、世田谷区民の皆さんにもっとこの学会を知って頂けるようにして、大会が福祉や介護への理解を深める機会になるようにすることです。今日の分科会でのまとめにもございましたように、福祉があるいは介護の実践がさらに地域を基盤に広がっている、あるいは世田谷から発信していく、そういうわくわくした学会になっておりますので、ぜひもっと区民の方達がそういう発表や話しを聞けるような、そういう仕組み、あるいは仕掛け・企画というものを今後考えていただけたらと思います。

日本大学文理学部では来年度の公開講座のテーマをまだ仮ですが、「介護、その予防と対応」として企画しております。それは地域の方たちの要望もあり、関心も深いという事で、従ってそこでも地域の多くの方が聴講されるので、そのような時にこの学会をご紹介していけたらと思っております。もっと区民の方たち、いろいろな人たちにこの学会を知っていただき、学会の活動を継続しさらに発展していけるような大会になるのではないかと思います。

最後に、今回の大会に参加してくださった区民の皆さま、福祉実践者の方々、また運営を担ってくださった世田谷区社会福祉事業団、大会を支えてくれた世田谷区と多くの学生ボランティアに深くお礼を申し上げたいと思います。いろんな方たちの支えがあって無事終了することができたと思います。本当にありがとうございました。以上で大会総括とさせていただきます。



せたがや福祉区民学会 役員名簿

および

第2回大会実行委員名簿

せたがや福祉区民学会 役員名簿

役職	氏 名	所 属/職 名
会長	がれ デッオ 石井 哲夫	日本社会事業大学名誉教授
副会長	ナガヤマ マコト 永山 誠	昭和女子大学人間福祉学部福祉社会学科教授
理事	秋山 由美子	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	アゲハソ ヨショ 上之園 佳子	日本大学文理学部社会福祉コース准教授
理事	飯田 恭次	世田谷区社会福祉協議会会長
理事	マイズ レイネケ 今泉 礼右	日本大学文理学部社会福祉コース教授
理事	ゥェダ ユウジ 植田 祐二	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
理事	*** ²	国際医療福祉大学大学院教授
理事	加藤美枝	世田谷区生涯大学専任講師
理事	カワ /トタ - オ サム 河畠 修	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
理事	桐原 宏行	駒澤大学文学部社会学科社会福祉専攻主任
理事	タケウチ タカヒト 竹内 孝仁	国際医療福祉大学大学院教授
理事	ッジ 타 	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	大田 英田 篤	世田谷区発達障害相談・療育センター長
理事	パシモト ムッコ 橋本 睦子	特別養護老人ホームさつき荘施設長
理事	ntfig	成城リハビリテーションクリニック
理事	堀川 雄人	世田谷区地域福祉部長
理事	459 #53 村田 幸子	福祉ジャーナリスト
理事	ヤマギシ きュ 山岸 道子	東京都市大学人間科学部児童学科教授
監事	対野 まゆみ	日本放送協会学園社会福祉コース教諭
監事	ウメムラ コウジ 梅村 恒司	世田谷区シルバー人材センター参与

第1期(H21.12.12~H23.3.31) 会長、副会長以下50音順

せたがや福祉区民学会 第2回大会 実行委員名簿

	氏 名	所 属/職 名
委員長	タナカ ソウジ 田中 荘司	日本大学文理学部客員教授
副委員長	1315 L1 25 今泉 礼右	日本大学文理学部社会福祉コース教授
副委員長	アゲハソノ ヨシコ 上之園 佳子	日本大学文理学部社会福祉コース准教授
委員	7+ヤマ ユミコ 秋山 由美子	世田谷区社会福祉事業団理事長
委員	イノウェ タシ 井上 仁	日本大学文理学部社会福祉コース教授
委員	ウェダ ユウジ 植田 祐二	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
委員	小澤弘美	世田谷区社会福祉協議会地域福祉部長
委員	加藤美枝	世田谷区生涯大学専任講師
委員	77.79 *** 河畠 修	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
委員	カワムラ /ブキ 川村 宣輝	日本大学文理学部社会福祉コース准教授
委員	コイデ アキコ 小出 昭子	世田谷区高齢福祉課管理係長
委員	トモダ アツシ 友田 篤	世田谷区発達障害相談・療育センター長
委員	長尾 譲治	駒澤大学文学部准教授
委員	ナガヤマ マコト 永山 誠	昭和女子大学人間福祉学部福祉社会学科教授
委員	パシモト ムツコ 橋本 睦子	特別養護老人ホームさつき荘施設長
委員	パセガワ き 長谷川 幹	成城リハビリテーションクリニック
委員	45% サチコ 村田 幸子	福祉ジャーナリスト
委員	ヤマギシ まコ 山岸 道子	東京都市大学人間科学部児童学科教授
委員	ヤマダ ユウコ 山田 祐子	日本大学文理学部社会福祉コース准教授

事 務 局

	対対姫嶋	*** 祐美加	日本大学文理学部
= t	ョョヤマ 横山	未樹	日本大学文理学部
) [/ダ 野田	博二	世田谷区福祉人材育成・研修センター
ž Ž	ンブサワ 澁澤	典子	世田谷区福祉人材育成・研修センター
		tryp 誠作	世田谷区福祉人材育成・研修センター

資 料 編

せたがや福祉区民学会 第2回大会

参加人数 334人 (学生30名・理事等役員・助言者21人含む)

分科会参加者(各発表終了時の人数)

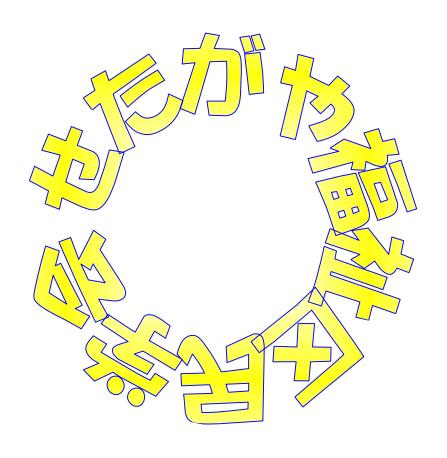
発表番号	1	2	3	4	5	6	7
第 1 分科会	8	11	14	14	12		14
第2分科会	23	32	29	24	24	27	38
第3分科会	35	75	60	60	20	33	25
第4分科会	30	21	34	16	24	17	32
第5分科会	71	21	30	22	31	22	18
第6分科会	16	19	17	18	16	24	
第7分科会	26	34	26	33	53	52	20



受付の様子



発表証授与の様子



発行 せたがや福祉区民学会発行日 平成23年3月

<事務局> 世田谷区福祉人材育成・研修センター

〒157-0066 世田谷区成城 6-3-10

成城6丁目事務所棟1階

TEL 5429-3100 FAX 5429-3101

E-mail fukushijinzai@setagayaj.or.jp

URL http://www.setagayaj.or.jp/jinzai